

出し(吉岡梁)

「接排好」鹽梅好しとも書く。田樂豆腐をいふ。元祿正徳頃上方では田樂を賣るに「蕎麥豆腐の鹽梅よし」と聲立て、賣り歩いたので(煎餅を見よ)「自」この物の名になつたのである。あんばくよしでも物くらふといふ。田樂豆腐でも食ふといふ意。「ぢぢば」ぢぢ(打)の訛で接頭語めきた語である。丹波興作に「ぢぢの貨をぢぢあげ」とある「ぢぢ」と同じ語である。



(傾城紫短氣第三編所載)

あんばくもの 打碎く程なればおのれば頼まぬ、あんばく者め、又捻餅くひたいか(會稽山)

「わらは(童)が普便で「わつぱ」こつまり「わんぱく」し字音を増加して訛り「あんぱく」と子音の脱落した訛語であつて「あんぱく者」は即ち「わんぱく者」「ちたつち者」とらふことでも、小兒にさふ。

あんぱら 鬼とも組むべき男ども、あんぱら取つて敷かすやら(博多) 奥を掃いて拭うて、新しいあんぱる敷け(國性爺後日)

南洋地方に産する貝多羅(アンペラ)屬の多年生草本植物の葉を堅に細く裂いて編んだ席。あんぱらはあんべるともつた。あんもちか 五十餘級の衆徒の首、光明に照されて果累と連りしは、梢に實る佛前の、あんもちかとも

謂つてへく(女護身)

「菴羅羅迦阿羅羅迦」とも書き、略して菴羅とさひ、印度菴羅國精舍に多く繁茂してゐる樹で、我國では大和國葦原郡山神村城内に一株生茂し、その實は林檎に似てゐる。西域紀八に「阿羅羅迦、印度菴羅之名也」。

*あんやう 安養極樂世界(薩摩歌) 安養無垢世界(彌九) 安養世界(反魂香) 安養寶國(賀古教信)

*あんらくこく 安樂國(賀古教信) [安樂國]阿彌陀佛が四十八箇條の大願を起し、長時修行された結果、建設された西方極樂淨土の稱。無量壽經に「無有二三途苦難之名、但有自然快樂之音、是故其國名曰安樂」。

*あんらくせかい げにや安樂世界 ぶり今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音(曾根樹)

いらいち けい食み(吻吻)として云々を見よ。

いらかん いかん大度の御臺所 (明八州)

いらくん 元の根さしは豊後の國濱の市の遊君なりしが(百合彦)

*いらし 略して君ともいふ。遊女の稱。傾城。

似たる由、すなはち高房猶子となし、御徒然をいさめ人爲(酒呑童子) [猶子]兄弟親族または他人の子を養うて己の子とすること。養子。禮記檀弓篇に「兄弟之子猶子也」。

*いらしよく 和歌の道・文の道、有職等にも暗からず(大徳虎)

*いらいつ 墨つき筆勢、御家中の右筆兼にも少い程の器用人(川中島)

*いらいつ 筆に長じた者、武家の書き役。また元祿頃には、堀山遊のこの文にある荻野屋の八重桐のやうに、遊女町にも女祿筆が居り、また好色一代女(井原西鶴撰)と上つ方よろづに祿筆の條に「京に女祿筆とて立つ方よろづにつけて年中の諸禮覚え、……門柱に女筆指扇の張紙して、一間なる小座敷見上げに住みなし、山出した女ひとりつかひて、人の恩女をあづかること大方ならずと、毎日意はず清書をあらため、女に入る程の所作を教へし」とある。かうやら女祿筆も居たのである。

*いらいつ 千戈成揚相挟み、左輔右弼列を引く(國性爺) 左輔右弼の旗を立て(唐船節)

*いらいめん 宥免するも事による、曾我は君の御仇、不吟味にはなり難

し(百日曾我)

「看免罪科をなだめゆるすこと。北魏郭祚傳に「不問輕重、皆蒙宥免」。

*いかに まめで御下向羨ましい、今にいかい参りか(卯月潤色) 和女はいかいか物識ちや(羅迦) 明日お目に懸らう、いかう睡たい寝ます(生玉) (はていかうりんすりんすといふ女子ぢや(女腹切)) [寝さつち寝し。甚し。さうさう]は「か」の副詞形。

*いかに いがき越えしも戀の罪(丹波興作)

*いかに 白鞍・塗鞍・鏡鞍・金覆輪・銀覆輪・梨地・いかげち・らでん・かなかひ美を盡し(源義經)

*いかに 客は「きはいかにつげに、駕籠を飛ばす揚屋客(女腹) お徒足軽いかつ聲、こりやこりやお犬のお通り、乗物据まけて下馬致せ(千足犬) 侍畜生大たばけと、いかつ吐いてぞ申しける(出世書清)

*いかに 馬よ聴いたか聴いたかと 言へども、いかな馬の耳、風に嘶くばかりなり(鐘權三) さもない内はいかなこと、ならぬならぬと睨

付くる(個性語)

〔如何なる如何なことでも(聽入れぬ)。どうしても(承引せぬ)。〕

いがむ 獅子頭と狛犬のいがみあ

ひともしいひつべし(三國志) 吹く風と共に荒れたる猛虎の形、藤根に頬を摩付け摩付け、岩角に爪研立て、二人を目懸けいがみかかるを事ともせず(個性語)

〔鷹〕鷹が怒り嗥いて噛みつかうとするをいふ。法華經に「野鳥」童蒙強誦に「信」鐘頭屋本節用集に「鷹」、易林本節用集に「鷹をいがむ」とよんである。

いかりが でんもくらゐの眼の光、怒毛怒斑怒爪、千里も駈けん勢なり(反魂香)

〔惡斑〕怒つて逆立つ虎の斑毛。〔斑〕斑鳩類に屬し、大きき家鳩位で、頸に白羽毛環生し、足は赤色短毛。

いき 男盗人いき傾城と言ひざま取つて投付くれば(堀山姥) 半七のいき掏摸め、ようもようも親方を踏付けたな(女腹切) 生畜生の死畜生と、所存極めし涙の體(今宮) 嘉平次(生玉) 秘密といへば何言はずと盛、大騙の生賣僧、あれ追拂へ引縛れ(浦島) いき女郎め、わかすまいと誓文立てて口がため、悪い

ほぼけた(女殺) いき勸進 諸商人

〔冥途飛脚〕〔生人を叱り又は罵るときに、その言葉を強める爲に、「生又は死の語を相手に指す詞の上に添へていふ。こゝには「生」の添はつてゐるのを擧げたのである。安原貞宗撰、かた言(慶安三年刊)に「人を叱り罵るときに、己が腹の立つまゝに、息まき赤面して、せめて畜生とも言はで、いきづくしやう(生畜生)め、しづくしやう(死畜生)め、いきだはけ、しにだはけ、がつき(餓鬼)め、あはうめふんちうめなど、いとさきよくすまじやう言ふ事勿れなど。總て生・死ぬの三字を附けて、人を罵り待ること淺まらうと待るものなり。〕

いき 五十貫目が百貫目の銀は取替へて、親御の息が掛らすとも、物の見事に取立てましたし(博多)

いきい 活石なしの目は白黒との占(百合若)

〔活石〕園基にて、死なぬ石。

いきかた 暇を遣つた、廓を連れてお出なされと、切れ離れたる意氣方ば、さすが土地に住めばなり(夕馬) 武家のいきかた、なつめ御馬、足を早めて急がるる(女腹切)

〔意氣方〕意氣は氣性また心立て。心立てのさつぱりしてゐること。氣性のさわやかなこと。

生口 して先づ御用の事ありとは生口か死口か(卯月紅葉)

生きてゐる人の口密。

いきすぢはる 姫宮ぐるひ及びぬこと、息筋張るな歸れ歸れ(日本武尊) 爺ほどな様で、親ほどな者に

息筋張らする不敵者(隅田川)

〔息筋張〕息筋を張る。骨を折つて物事をすらすらにいか。息筋張る。

いきせ 母様いきせの折ならば、あれらに口なきかせうか(卯月紅葉)

〔生世〕世に生きてゐること。在世。存命。

いきせいはる 息勢い張つて喉が渴く(女腹切) 息勢張つて揚句に息杖まで戴いて(百合若)

〔息勢張〕息を張り氣勢を張る。氣力を盡す。息筋張る。

息杖 お駕籠待つて下されと引留れば、駕籠の者、ヤアこりや狼藉して息杖の胸打くらふかと振上ぐる(渡邊)

〔駕籠〕昇または天秤稱で物を擔ぶ者が、暫し荷を支へて肩を休め息をつ杖。

いきどし 必ず死んでたもるなと、泣き口説き勞げれば、涙を浮め手を合せ、いきどしげなる聲細く(隅田川)

〔息疾〕呼吸疾くしてせつない。氣息奄々。

いきは 四百日は何にした、いきばを聞かう(重井簡)

〔息音〕音聲。聲。

いきばね 口(砂でも)頬張らせ、いきばねを揚げさすな(鐵波三)

〔行脚〕行脚用鉢。

なはずは、ないいきばねでも立てざるぞ(田世景清) それそれと引起し、口に込み薬、いきばね立たすな(百日曾梵)

〔息骨〕音聲。息は聲の意(いき)見こと。〔ほねは、おとほね〕などの「ほね」と同じもので、語意を強めるまで。

いきみたま 父様今年は丁七十の賀の祝儀、一門衆の振舞もそもじ下りな待受けて、生御魂の祝一所に

と、盆送延すし書かれしが(永明日)

〔生御魂〕生見玉、生身魂なども書く。七月八日から十三日までの間に、吉日を擇んで兩親を齎し、その壽命長久を祝ふことを生御魂の祝とし、孟蘭盆經變圖の文によれば、「願くは現生の父母をして壽命百年、病無く一切苦惱の患なからしむ」とあつて、孟蘭盆會は生ける二親を供養し、兼ねて過世七世尊親の善提を祈るものであつたが、いつの程よりか孟蘭盆會は過去精靈の善提を祈り、生ける兩親を供養することとは別になつて生御魂の祝をした。親元日記に「寛正六年七月十一日新造御生見玉、文明五年七月十一日公方御生見玉御祝也」と見え、日記紀事(貞享二年の序あり七月の條に「此月公武兩家各被齎養尊親、是謂生身魂、或稱生盆、地下良隣亦然」)

いきやく 我が身上の滅却あり、いきやくも交り行き通ふ(女殺)

〔みきやく〕(運却)で、運却即走の意か。この文「みつきやく」「めつきやく」「ちきやく」と、同じ脚韻をよませて文を修飾したのである。

いきる こちやげんなりとなる程八めはいきつて(丹波興作) 手かけはいきつて、科もない傳三郎にいひかぶせしやるなと、たけりかかつて怒りける(卯月紅葉) 御吉左右の早飛脚いきり立つて案内す(淀

【鯉】

【勢を張る。勢込む。伊呂波字類に「勢。いづくさがみ。軍神の手向くさ。それ突殺して切入れ(鯉丸)。(軍神)武運を守る神。毘沙門を祈る神。軍神は何神とも定まらずではぬい。武勳顯著な者を軍神と仰ぎ、又北斗七星中の破軍星を云ふことある。軍用記第七に「軍神は天照大神、經津主神、武甕槌神、大物主神、事代主神、神武天皇、日本武尊、神功皇后、八幡大神なり、これ皆日本の軍神なり、摩利支天、不動明王、十二神將などの類は天竺の神なり、佛法にある事なり」。

【いづくさがみ】 軍神の手向くさ。それ突殺して切入れ(鯉丸)。(軍神)武運を守る神。毘沙門を祈る神。軍神は何神とも定まらずではぬい。武勳顯著な者を軍神と仰ぎ、又北斗七星中の破軍星を云ふことある。軍用記第七に「軍神は天照大神、經津主神、武甕槌神、大物主神、事代主神、神武天皇、日本武尊、神功皇后、八幡大神なり、これ皆日本の軍神なり、摩利支天、不動明王、十二神將などの類は天竺の神なり、佛法にある事なり」。

【いづくせ】 足も冷えて鐵釘を、胸に打たるるいづくせの思ひ(重井簡) 【鐵釘】鐵何の滴の義から轉じて、思ひの増増して胸を渡したしめたること。

【いづくはな】 濱納屋の下で組んづ轉んづしてゐたを、いづくはなが見て来た(歌念佛) 皆皆科に落さん爲、跡から親王・長歌がいくばな出ようも知れまいぞ(持統天皇)

【池田炭】 火斗は焦るる紅葉ばな、盛つたる如き池田炭、遠慮もない儀が火鍵に移し(重井簡) 【池田炭】 一庫炭とも云ふ。海陽群談・十六に「一庫炭。河邊郡一庫村の山中に炭窟を造り、山林の隙木を伐り採り、窟に入れ口を閉蓋で、以て土蓋に、日を經て開之、市店に送るの始、先づ池田市に立つを以て、世に池田炭と稱す、今近郷に習得之、所々に窟を掘り、此炭自然と香甚美にして、火氣強く和也、因て茶室に置けり。根林子がこのあたりの著想は、謡曲・紅葉狩によつたものである。謡曲・紅葉狩に二人は知らじとちとちとけて、ひとり眺むる紅葉はの、色見えけるか如何にせん。」

【いけづき】 いけづき。磨墨。大黒・小黒失せし(のかた(大磯丸) 【生駒】長門本・平家物語、摺墨。いけづきの條に「この馬をいけづきといひける事は、馬をも人もくろふ馬なり、八寸の馬とぞきこえし」佐々木四郎が宇治川の先陣したときはこの馬に乗つてゐた。

【いけどうすり】 女房子供の身の皮をばさぎ、その銀でおよま狂ひ、いけどうすりめ(天網魚) 【いけは】いけの鞆、「いき生の條を見よ。」「どうすり」はその條につきて見よ。人をいたく罵る詞で、大鯨人といふ程の意。

【いけどしより】 いけ年寄の推參者、槍り殺すは易けれど(大磯冠) 【生年寄】「いけは」(生)の鞆、「いき」の條を見よ。 役立たずの老朽といふ程の意。

【いざせ給へ】 重れて不覺を取らんより、いざせ給へ(馬引寄せ(國性爺) 【どうれ房若、いざ給へ(母上(抱符) 仔細は静に承らん、いざせ給へ(といふ所(蠅丸) 誘ひ立てる時に發する感動詞。「いざせ給へ」(いざせ給へ)は、たど給へ」といひ、出で立たせ給へ」の略。

【いざうれ】 いざうれ若君、一生の御合戦よそに聞いてあるべきや(源義經) いざうれ房若、いざ給へ(母上(抱符) 誘ひ立てる時に發する感動詞。まきあ。 平家物語卷九、一二のかけの條に「いざうれ、土肥が承りて向ひたる西の手へ寄せて、一の谷の眞先かけんといひければ」。

【いさかふ】 油断はせぬと、棒振廻し

いさかふ(聲(反魂香) 我が家に歸れば、家の内女の聲、いさかひは何事やらん(天織冠) いさかひ過ぎての棒きり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折) 【いさかふ】(言逆)の約つた語。爭論す。 謡曲・本節用集に「鬨聲」。

【いささ】 いささ小海老の連れ諸子(以呂波) 【いささ】 小の義。淡水魚で體の長さ一寸許り。

【いささ】 蕪のそとものいささ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける(天網魚) 【細小川】小川。

【いささ】 御徒然を諫めの爲(反魂香) 【諫】諫言する意より轉じて、慰める。

【いさりび】 海人のいさり火ちちちらと、星が螢か影うすく(天神記) 【漁火】「いさり」は「いそまり」(磯探)の略。 魚貝などを取る時に焚く炬火。

【いさ】 葉平悦び、おおいしくも申せし、汝供奉仕れ并筒 郡司打首肯き、おおいしくも申せし三郎と(小栗判官) 【美】「よし」(良)の轉訛語か。旨い。 神妙なけなげな。「よし」は「よし」(美)の副詞形。

【いさ】 身代もいしくなつて、わんば一枚にはなつたれど(加増曾我) 前條の「よし」(美)の逆用語。 驅い。「よし」は「よし」の副詞形。 物類稱呼。卷五に「わんば」といふ事の上總下總にてイシイと云ふ。

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いさかふ】 油断はせぬと、棒振廻し

いさかふ(聲(反魂香) 我が家に歸れば、家の内女の聲、いさかひは何事やらん(天織冠) いさかひ過ぎての棒きり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折) 【いさかふ】(言逆)の約つた語。爭論す。 謡曲・本節用集に「鬨聲」。

【いささ】 いささ小海老の連れ諸子(以呂波) 【いささ】 小の義。淡水魚で體の長さ一寸許り。

【いささ】 蕪のそとものいささ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける(天網魚) 【細小川】小川。

【いささ】 御徒然を諫めの爲(反魂香) 【諫】諫言する意より轉じて、慰める。

【いさりび】 海人のいさり火ちちちらと、星が螢か影うすく(天神記) 【漁火】「いさり」は「いそまり」(磯探)の略。 魚貝などを取る時に焚く炬火。

【いさ】 葉平悦び、おおいしくも申せし、汝供奉仕れ并筒 郡司打首肯き、おおいしくも申せし三郎と(小栗判官) 【美】「よし」(良)の轉訛語か。旨い。 神妙なけなげな。「よし」は「よし」(美)の副詞形。

【いさ】 身代もいしくなつて、わんば一枚にはなつたれど(加増曾我) 前條の「よし」(美)の逆用語。 驅い。「よし」は「よし」の副詞形。 物類稱呼。卷五に「わんば」といふ事の上總下總にてイシイと云ふ。

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いさかふ】 油断はせぬと、棒振廻し

いさかふ(聲(反魂香) 我が家に歸れば、家の内女の聲、いさかひは何事やらん(天織冠) いさかひ過ぎての棒きり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折) 【いさかふ】(言逆)の約つた語。爭論す。 謡曲・本節用集に「鬨聲」。

【いささ】 いささ小海老の連れ諸子(以呂波) 【いささ】 小の義。淡水魚で體の長さ一寸許り。

【いささ】 蕪のそとものいささ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける(天網魚) 【細小川】小川。

【いささ】 御徒然を諫めの爲(反魂香) 【諫】諫言する意より轉じて、慰める。

【いさりび】 海人のいさり火ちちちらと、星が螢か影うすく(天神記) 【漁火】「いさり」は「いそまり」(磯探)の略。 魚貝などを取る時に焚く炬火。

【いさ】 葉平悦び、おおいしくも申せし、汝供奉仕れ并筒 郡司打首肯き、おおいしくも申せし三郎と(小栗判官) 【美】「よし」(良)の轉訛語か。旨い。 神妙なけなげな。「よし」は「よし」(美)の副詞形。

【いさ】 身代もいしくなつて、わんば一枚にはなつたれど(加増曾我) 前條の「よし」(美)の逆用語。 驅い。「よし」は「よし」の副詞形。 物類稱呼。卷五に「わんば」といふ事の上總下總にてイシイと云ふ。

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いさかふ】 油断はせぬと、棒振廻し

いさかふ(聲(反魂香) 我が家に歸れば、家の内女の聲、いさかひは何事やらん(天織冠) いさかひ過ぎての棒きり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折) 【いさかふ】(言逆)の約つた語。爭論す。 謡曲・本節用集に「鬨聲」。

【いささ】 いささ小海老の連れ諸子(以呂波) 【いささ】 小の義。淡水魚で體の長さ一寸許り。

【いささ】 蕪のそとものいささ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける(天網魚) 【細小川】小川。

【いささ】 御徒然を諫めの爲(反魂香) 【諫】諫言する意より轉じて、慰める。

【いさりび】 海人のいさり火ちちちらと、星が螢か影うすく(天神記) 【漁火】「いさり」は「いそまり」(磯探)の略。 魚貝などを取る時に焚く炬火。

【いさ】 葉平悦び、おおいしくも申せし、汝供奉仕れ并筒 郡司打首肯き、おおいしくも申せし三郎と(小栗判官) 【美】「よし」(良)の轉訛語か。旨い。 神妙なけなげな。「よし」は「よし」(美)の副詞形。

【いさ】 身代もいしくなつて、わんば一枚にはなつたれど(加増曾我) 前條の「よし」(美)の逆用語。 驅い。「よし」は「よし」の副詞形。 物類稱呼。卷五に「わんば」といふ事の上總下總にてイシイと云ふ。

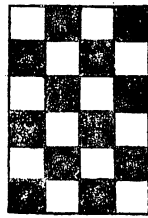
【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

【いしうち】 祝言の夜の石打ば、打か

引かせず、乗るも乗らせず石子詰、一騎も残らず打ちしやがれ(蛙合戦) 〔石子詰罪人を坑中に入れ、砂石で埋め殺す刑。(増補)俚言彙覧に、「いしごめ。小石にて人を生きながら埋る刑なり、中古邊土にて往々ありし事なり。〕

*いしだたみ 石疊は信濃の國の住人根井の太夫大彌太(五人兄弟)



〔みだしい〕

〔石疊〕紋の名舞の本夜討曾我(古活字版)に、「いしだたみは信濃の國の住人ねんいの太夫大彌太」とありて、この紋繪が載せてある。

いしなどり 的場の庭の雨の後、いしなどりして遊ばんと(小栗判官) 〔六投取〕石を投げて取る義。若干の小石を撒き、その中の一つを空に投げ、その石の落ち來ぬ間に、撒いた石と共に獲み取る女兒の遊戯。易林本「節用集」に、「投石」。

いしのおび 下女下部ども立掛り、引解く玉の石の帯(日本武尊) 〔石帯〕束帯の時に着用した革製の帯である。石玉を飾りしてあるから石帯または玉帯といふ。その製は、黒い革帯の後にあたる所に方或は圓形な玉または石角の類を十個ほど懸付け、左の端に鈎具で締めるやうにしてある。方或は圓形な玉または石角の類は、人品身分の尊卑によつて違つてある。昔の帯は唯一筋のものの一重帯にして、鈎具に適して締めていたのであつたが、後には背の方にのみ石の附いた革帯にして、その兩端に組糸を附け、それを前に廻して結ぶやうにした。別に上手と云

うて革紐を革帯の一端に付けて、一筋の長い革帯を引廻したのが餘つてある形に見せた。

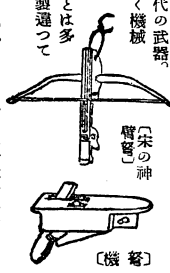
*いしばや 江戸屋勝二郎と云うては、石火矢でも崩れまい(冠鑑) 〔石火矢〕火の太砲。和漢三才圖會「正徳三年刊」に、「中華從來雜貨之未精、至大明盛年、以爲第一兵器、凡砲石之玉、自三四五百目至四五百目、以鐵巧放出、謂之石火矢也。」

*いしべきんきち しゃらくき津の三介三藏石部金吉泊りなら泊めてたも(丹波與作) 〔石部金吉〕石の如く金の如しといふを人名のやうに云うたので、律義者をいふ。三教色に、「喉屋の石部金吉郎も兜を脱いで降参。」

*いしゆ 浮世の戀に身を砕くも、命懸けるば同じこと、例へば酒のいしゆある中、二日心か公用か、酔うてはならぬ首尾もある(倉橋山) 〔意趣〕遺恨。「意趣はもと心意の趣向の義で、法華經方便品に、「隨其所說、意趣難解」とある。遺恨の意に云ふはその義を轉じたのである。

*いしゆみ 矢窓に弩隙間なく(國性爺) 〔弩〕古代の武器。石を彈く機械。弩箭 〔弩〕

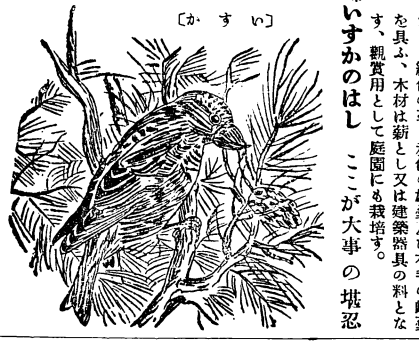
いしらまかす 搦手の軍味方拔群いしらまかされ、片岡太郎備前の平四郎討死を遂げ候(源義經) 〔射白負かす〕射撃に氣乗もなう負かす。射し



らます。いしんぢよ 父御様は隠れもないいしんぢよなり(善門松) 〔いしぢやう〕石丈の説。石のやうに堅氣な丈人。石の如く律義な義。珊瑚天狗三に、「いしんぢよは石丈と書いて石の如く堅き人といふことなり。丈は丈夫といふことにて、男の通稱なり。」

いす 馬屋の總五いす割木おつ取りのす、源八が眞甲欺打ち(酒吞童子) 〔杵〕ひよんのきとも云ふ。本邦産地に自生する檜類。樹を高さ二丈五尺に運ず、葉は長楕形をなして互生し、花は小形で花冠なく、緑色の萼、赤色の雄蕊及び有毛の雌蕊を具ふ。木材は薪し又は建築器具の料となす、觀賞用として庭園にも栽培す。

*いすかのはし ころころが大事の堪忍 〔かすい〕



と手を懷へ幾度か、兎やせん角やしうけ鳥、鵝の嘴のくちひがふ心を知らぬぞ是非もなき(冥途飛脚) 〔鵝嘴〕鵝の嘴が交交せる鳥なれば、以て物事のくちひがうて思ふやうにならぬことになり。

夷齊 夷齊が武王を憤り、終に首陽に飢ゑたるものな(聖徳太子) 伯夷と叔齊の兄弟をいふ。支那上古、殷時代の義士である。周武王が殷紂王を討つ時その非を諫め、後に周の世となるが、周の粟を食ふを深しとせずして首陽山で餓死した。史記伯夷列傳に、「西伯也、武王報木主、號爲文王、東伐紂、伯夷叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、安及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎、左右欲兵之、太公曰、此義人也、扶而去之、武王曰、子股、天下宗周、而伯夷叔齊耻之、義不食周粟、隱居首陽山、采薇而食之、及饑且死、作歌、其辭曰、豈彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽播沒兮、我安適歸矣、干嗚呼命之衰矣、遂臥死於首陽山。」

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

*いせざくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

いせさくら 出雲八重垣八重櫻、さてばさてばさては神明伊勢櫻(真古教傳)

「伊勢櫻」の一種。花八重で淡紅紅色である。遅く咲きて花終りに近い。終りと尾張と訓違じ、尾張に近いは伊勢であるとして、この名がある」と云ふ。

いせのおし 御被配りの伊勢のお師あす (其熊太平記)

「伊勢御師」伊勢太神宮の身分取の神宮で、毎年太神宮の御縁札を諸國に配る者。

伊勢の御縁日 明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され(重井簡)

伊勢講で會合する十六日(伊勢講を見よ)を伊勢の御縁日と云ふ。

伊勢の濱萩 伊勢の濱萩・難波の蘆、よしといふも同じ草か(佐々木)

「物の名も所によりて變るよなう」を見よ。

いせを いせをの海人あすにあらねども、そのはま萩野八重桐(今宮)

「いせ」は伊勢。「た」は感動の助辭で、源氏物語須磨の巻にも、うきめかるいせをの海人を思ひきれなどある。勢陽五節蓮葉(安阿親歌集)首巻下に、「伊勢雄兵士。此國伊勢の海濱に居して漁を業とす海民を謂なり」

いせをどり 小町踊・伊勢踊、見せたい物は都踊ののき拍子(女舞鳥)

「伊勢踊」伊勢音頭で踊るのをいふ。勢陽五節蓮葉(安阿親歌集)首巻下に、「伊勢踊(或伊勢音頭、曲調音調)一種の舞踏あり、伊勢音頭」と云ふも同じ、婚家の歌妓の一曲節なり。

いそふれ (振袖始(源經經))

「いざうれ」を見よ。

いそもじ 數萬人心心の願立に、神の御身さへああいそもじの、まして流れの憂節や(生玉)

「急文字」急がしの文字詞。急がし。文字詞

についで「いそもじ」の條を見よ。

いたいけ 孫を持つたも名ばかりで、いたいけらしい顔も見ず(賀古教僧) 門内へ乗入りし振いたいけにおとなし(夕霧) 一子禿の功力によつて濡れしやうごんの里に馴れ、いたいけこよれの愛敬にほられ給へ(扇八景)

「いたいけ」は「いせ」の誤りか。

「いたいけ」は「いせ」の誤りか。

「いたいけ」は「いせ」の誤りか。

「いたいけ」は「いせ」の誤りか。

いだしきぬ 折節陣中御車は出衣の用意なし(聖徳太子)

「出衣」中古、花麗を競ふ爲に表衣の下に下着の美々しいのを出したのである。直衣狩衣などの表衣の下に下着の裾が出で、裾の外に垂れて表衣の裾の下にも出した。牛車に乗つては、女は籠の下から袖口及び袂腰を出したのである。

いたしこ だきすくめても爪立てて、振つてくをいたしこ、放せば離れてかけ出づる大經師) 戸をあけ片足踏込めば、内よりあいたあいたしこ、横腹を踏みくさる、何者ぢや(丹波與作)

「いたしこ」は増加した音で、「はん(判)とはん(判)」、「あり(應)とありん(と)などと同じ類である。痛し。「あいたしこ」は感動詞嗚呼である。

いたち 秘藏の仔猫を馬程な鼠が唾

へて駈出すやら、屋根では鼯が躍るやら(堀山遊)

「鼯」肉類の獸、鼠に似て長さ一尺五寸許、毛は赤黄色、夜間出て鼠、鼯など毒害して生血を吸ふ。「鼯が躍る」は、猫が鼠捕りや鼯が笑ふ」といふ童謡に據つたものか。「鼯の道切」を見よ。

いたつきのまともや 本田が矢に「は家名も知らず慮外千萬の鹿論(會務山)

「平頭節的矢」いたつきは鏃の一種である。

「平頭節的矢」いたつきは鏃の一種である。

「平頭節的矢」いたつきは鏃の一種である。

「平頭節的矢」いたつきは鏃の一種である。

「平頭節的矢」いたつきは鏃の一種である。

伊丹酒 はや本復の伊丹酒(今宮)

痛みが本復するを伊丹酒にかけたのである。

攝陽群談(元祿十四年刊)卷十六、名物土產の部に、「河邊郡伊丹村の市庄に造り、神崎の驛に送り諸國の雜に出す。香味甚美にして深く酒を好人味之、當所の酒を知る事他に勝る故也」。

いたらがひ いたら貝は岩永黨(五人兄弟)

「いたらがひ」は「いたらがひ」の誤りか。

「いたらがひ」は「いたらがひ」の誤りか。

いたりぞめ りんす小袖のいたり



「伊多良貝」伊多良貝の紋所。

染、緞子・天露絨・金更紗(畦合戦)

「至染」至り盡した染物。意匠を凝した染物。

いたりふう 朝比奈の三郎同道にて、忍ひ出掛けのいたり風虎が磨)

「至風」行き届いた風。氣の利いた姿。

いたんなり 我こそ一の矢は射たんたれ(會務山)

「こそあるなれ」を「ござんなれ」と云ふやうに、「射たるなり」のなが鼻にかかる音であるのでその上の「る」が撥音んになつた詞。射たるのぞや。

いち いち立てて屋財家のくづし(寶博多)

「市寶賣の市」寶博多。

いちげ 一夏に一部夏書せし大慈悲の普門品(天網島) いちげくじゆんの大行に、深山深谷識誦して、廻りけるこそ心切なれ(加増會歌)

「一夏」四月十六日(或は十五日)から七月十五日まで、僧徒一堂に會して佛道を修行する。この期間を一夏といひ、その日數九十日あるを以て一夏九十日といふ。蓋しこの期間は印度にては霖雨期なので、爲に釋尊弟子を精舎に集めて、各自の修業進路に勵めしめられたり起つたのである。また夏時は道路に蟲類多ければ、佛道修行者はこれを踏殺すまいと一夏の間禁足して寮に籠る。これを安居といふ。經音疏に、「自四月十六日・前安居入制至七月十五日・爲受臘之日、若し俗歲除日」。

いちげん 一げんながら武士の役、見殺しにはなり難し(天網島) 今日

の客は一げんの田舎侍(永朝日) あたら肌を柏屋のさがば、大和の一げん客が今日は天満の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと(生玉)

「いちげん」一げんながら武士の役、見殺しにはなり難し(天網島) 今日

の客は一げんの田舎侍(永朝日) あたら肌を柏屋のさがば、大和の一げん客が今日は天満の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと(生玉)

「いちげん」一げんながら武士の役、見殺しにはなり難し(天網島) 今日

〔二見〕初會。初會客といふ。浪花方書に「うちげん。一見なり、遊里の言葉、町にてもちよ。」

＊いちぢり 一期男持たすにあやるか
〔藤原歌〕 又平一期の浮沈ぞと（反魂香） 一期と思ふ女房を我が物顔のみにくさに、苛つは戀の癖なれども二枚槍。あま有難い、これぞ我が一期の灌頂、未來の血脈疑ひなう成佛します（唐船頓）

〔一期〕生。生涯。一期は一生死間を云ふのであるが、轉じて死期のことにも云ふ。〔二期の灌頂〕とは臨終の際の灌頂（灌頂はその條を見よ）。

＊いちごころ 覚えがなうて大將になるものと、壹越調をかすり上げ（飛船頓）

いちごんはうおん 憲法に兵法の師弟の契約親切にて、一言はうおんの下人となり（吉岡染）

〔壹芳恩〕一言の恩に感じて主として従ふこと。太平記「徳十、三浦大和合戰恩の條に、「其外諸代奉公の郎従、一言芳恩の軍勢ども、三百餘人引返し討死しける間」。

いちざあそび 一座遊ば如法めく（女殺）

＊いちぢりな がれ 大事の男を唆かしての心中は、さすが一座流れの勤めの者、義理知らず偽り者と（天網鳥）宮城野と申す傾城を人に誘はれ、二三度は一座ながれの御遊び、四

度馴染めば五つめは、ばや陸じさ彌増り（寛古教傳）

＊いちじ 一これより修行をかへ、一字半銭の頭陀をため寛古教傳。いかやうとも仕送つて一銭一じ損かけまじ（冥途飛脚）

〔一字〕一文。文字とはも別義で、説文序に、「依類聚形謂之文、形聲相益謂之字」宋鄭樵の說に「獨體爲文、合體爲字」。元藏師の說に「獨文爲文、合文爲字」と見て、一字は一文で、一文は一字と同じものとる。「じ」を見よ。

いちじがき 光は暗き門行燈、大和屋傳兵衛を一字書、眠りがちなる拍子木に（天網鳥）

〔二字書〕字をくづして一筆のやうに書き下すこと。ひとふでがき。虚傳朝野方言（寛政六年刊）揚屋井灯刺しと、復筆の條に、挑おじる十二種を畫き、何れにも屋號などあつて、それが字をくづし積けた一字書になつてゐる、これは後世のものなれども、近松の當時を想見するに足る。

いちじきんりん 七佛薬師・一字金りん（嵯峨天皇） 守敏は一字金輪のほふ我劣らじとせめかけらるる（以呂波） 冥道供・一字金輪の法（弘徽殿）

〔二字金輪〕字輪玉佛頂ともいひ、本體は大日如来で、この如来が一切最勝三摩地の定に入つて説かれを児女を人格化したもので、一字とは其兒女（たゞしんぞう）多動（たつぞう）兩（りう）三曼多動（さんぜんどう）兩（りう）佛頂（ぶつてい）中の「佛囉囉（ぶつらら）」をいふ。一字金輪の修法を一字金輪法（一字金輪佛頂法の略）とす

ひ、息災の爲に修して秘法たる由、要略抄に見えてゐる。

＊一七夜 轟の御坊にて一七夜は通夜申し（出世景清）

人死して七日間をいふ。この間は毎夜僧來つて死者の爲に讀經す。それより二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日・百日目に供養す。

いちじふんさい お使に一汁三菜との御意なれども、大阪藏屋敷留守居方の振舞でも、随分輕いが二汁五菜（實隆）

＊いちぜんもり どうした事やら此頃は一膳盛の客さへない（丹波與作）

〔膳盛〕膳飯。一膳幾らと價を定めて賣るもの。一膳盛の客とは、ちよつと立寄つて一膳盛を食うて行き過ぎる客のこと。

＊一代教主 未世一代教主の如來を見よ。

＊いちだん 明日から八專土用前、一段とようござら（今宮） 扱ばおちちが祈禱なさるるか一段一段（安毅）

先づ御無事にて一段、清十郎も息災で（歌合佛）

〔一段〕ひときは、「一段とよら」などいふを略して「一段」とばかり云ふことがある。謡曲鞍馬天狗に「當年は一段と見事にて候。」

＊いちぢりな 未來でたしかに逢ふ事ば三世の諸佛の請合にて、こればかりは一定と、涙をつつむ思ひの色（虎が磨）

＊いちにん 一人とは天子帝の御事（國性連）

〔一人〕天子。大寶璽合弁に、御籠一人儀（表四海、朱白一人者天子也）。

＊一念化生 心ば昔にかばらざれども、一念化生の鬼女とや（堀山堤）

一心に思込んだ執念によつて生れかはつたもの。堀山山堤に「一念化生の鬼女とや」。

＊一念三千の機 比叡山の西塔にて天台四觀の旨を開き、一念三千の機を顯して三千人の敵の首、數度の軍に討取つて天護す。

一念とは瞬時に起る心。三千は森羅萬象を總括した名。地獄界より佛界に至る十界は、一界毎に十界を有して百界となり、百界は一界毎に十如是を有して千如是となり、而して五種衆生國土の三種世間は各千如是を具有して界如三千の法をなす。この三千の諸法は吾人の心に具有するが故に三千の機といふ。

苟も一念存すれば、そこに必ず三千の法を具有すと説く。これを一念三千といひ、天台宗に於て立てる根本教義である。

＊一念信解 不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら妙覺の佛の位に至り給ふ、皆これ一念信解の徳（百日會談）

〔念信解〕一心に佛の教を聽いて信仰し、その義理を理解すること。

＊一念の角 一念の角筆ち、眼に光る邪正一如と見る時は（堀山堤）

〔一念の角〕一心に思込んだ執念によつて、惡鬼と現じ角を生じたこと。

＊一念發起 徳兵衛一念發起して（重井筒）

善提に向ふ初心懺悔の思を發起した義で、惡を悔んで善に向ふ心の起つたこと。

一の裏はすごろく 一番勝にかつ色の、花のお江戸に着き給ふ、一の裏はすご六の、さいはひあり喜びあり(舟渡與作)

采(襷子)の目の一の裏面は六なれば、一の裏はすご六をすご六(雙六)にかけ、さいはひに采をかきたのである。

市の側 漕出て見れば天満川、市の側なる初甜瓜(今宵)市の側(天網魚)

大阪天神橋北詰上手から龍田町までの濱側を天満川の側といひ、青物市場があつた。それが初甜瓜とつけたのである。

いちのじよう 世の中に絶えて心中なかりせば、二世の頼みもなからまし、誰かしそめしこの契、音に聞きしは生玉の、それが初の第市之丞(水朔日)

「市之丞」天和頃に居た大阪の遊女である。その市之丞と長右衛門と云ふ男とが大坂の生玉で天和三年五月十七日の晩に情死したもので、それが直に道頓堀の嵐屋、大和屋座、荒木座の芝居に上演されたといふ。これが心中狂言の最初であつたであらうから、心中又水朔日のこの文に、心中は「それが初の第一」といふに「市之丞」をいひ掛けていたのである。

一の胴 我我は一の胴二の胴、毛脇捉灯八枚目、雪を土壇の試物珍しからん(冷泉節)

胴體の上部を兩腋より少し下部。試斬の時、まづ人體を土壇の上に据えて(一)肩の邊摺付と云ふ。(二)毛無腋毛のある上部。(三)腋毛の生ひてゐる邊。(四)一の胴。(五)二の胴。(六)肋骨八枚目。(七)兩腋(腰部をさふ)と順次に斬落して、以て刀の利鈍を試すので

一の人の 一人の人の仰せを頼朝直に領掌して、今更變改はなるまじき(佐々木)

藤政開白の稱。頼朝抄に「執柄者必蒙二座之直官」故稱一人、又云一所。

一番太鼓 ほんに厚いつらの皮、其皮を太鼓に張り、あほうの天下一番太鼓、どんどんくさい事見たくない(虎が鷹)

江戸時代、芝居顔見世の初日八つ時(今の午二時)に最初に打つ太鼓。この文は一番太鼓といふことがあるので、それを阿呆の天下一番といふにかけたので。

いちひめ 一に市姫辨才天女、二は西の宮若惠美壽殿(雪女)

「市姫」市を守る女神。金光明辨財天を忿ずれば名譽福徳の利益あると傳へられ、辨財天を市姫といふ。

一佛異名同一體 釋迦と阿彌陀とは例へば目といひ眼といふが如くにて、一佛異名同一體(體九)

名こそ異れども、もともと一佛で同一體であるとの義。

いちちぶじよう ああこの駒よ、この駒よ、汝は法の道しるべ、鞭打たれし鞭の影までも、一佛乗の縁ぞかし(霧迦)

「一佛乗」一切の衆生は皆一様に成佛するを得る究竟の教法をいふ。乗は連戰の義、因人を載せて佛果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の教法をいふ。法華經に「但以一佛乘爲衆生說法」。

いちばん さうしては半七が一分

は立たねども(女腹切) それでは海野が一分立たず(百日會談) 今日の御料理隨分切り方に氣を付け、心一ばいでかせしと一分自慢、御褒美はなされいで存知の外の御叱り(香庚申)

「二分」その身分の義。面目。「二分自慢」とは、面目を施したと己一人で自慢氣になること。

いちまき 平野屋のかん一まきは語るも聞くと哀れなり(水朔日)

娘ばかりの豊島屋は、亭主は外の懸(一まき(女殺))

「巻」一部始終。一切。そのみに専心すること。自然居士(古稱瑠璃)第三に「命を限りて尋ね達ひ、この一まきを言譯し、何とぞわびて連れ歸り、この語現今も福山市あたりの土着人には往々用ゐられ、義理知らずの戀いちまきの奴」などといふ。

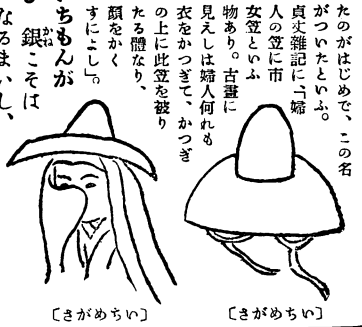
市村玉柏 市村玉柏・梅田橋と見立てたり、それなげに、はて渡れば色町、越ゆれば火屋、濡れにも憂ひにもようつ(今宵)

市村玉柏の藝風は梅田橋に見立てられる。そのわけは梅田橋を南に渡れば堂島新地の色所北に越えれば梅田の火葬場、戀ごにも憂ひごとにも上手である。役者謀火燄(寶永七年刊)若女形之部に「上々宮、市村玉柏。いづれお上手業でなければせり合もてけませぬ、むつちりとした御生れ付、物ごしあざやかにしてかはゆらしい風俗云々」

いちめがさ 市女笠きて二人連れ(丹橋)

「市女笠」古昔婦人の被つたもので、中高な漆塗の笠。もと市に出で、物を賣る賤女が被

たのがはじめて、この名がついたといふ。貞丈雜記に「婦人の笠に市女笠といふ物あり。古畫に見えしは婦人何れも衣をかつて、かつぎの上に此笠を被りたる體なり、顏をかくすによし」



いちもんが 銀こそはなるまいし、



いちもんが 判つく程は一門がひ、殊にわしと他人なればなほしも義理は缺かれず(重井筒)

「一門甲斐」一門の詮あること。「がひ」は價値の義。(言ひたいがひに言ふ)「がひ」も「一門がひ」の「がひ」と同じ語である。「かひ」を見よ。

いちやけんけう ちくらてくらの一

一夜檢校、終に見馴れぬ出立ちばえ(博多)

「一夜檢校」檢校は盲人に授けた最高の官で法印に推される。盲人が金千兩を上納することによって檢校になることができたので、さうしてなる檢校、所謂一夜つくりの檢校といふことが、輻じて俄成金のことにいふ。武野燭談に「座頭の前檢校になること、千金だに出候へば即日檢校になる故、俗に一夜檢校といふ」東海道名所記に「座頭もあはれ一夜檢校になし侍らば、雨氣の場の高く、蟻蟻が終のほり臂で有るべきを」。

いちやづま 御身に定めて思ひ者

か一夜妻、かりの情を忘れかれ、跡まで慕ふばやさしけれども(女備)

*いちやながれ 春立ち行けば色失せて、淋しき梅も捨てられず、これ天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、あだな袂に香を留めて(生玉)

一里塚 主の娘と、懇ろなど駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をええあはうな(歌念佛)

昔時待道に一里毎に土を盛り、その上に樹木を栽きて里程の目標としたもの。茗話(末田藤若御門筆記)に、元龜元年庚午、近江の國安土より都まで一里塚を築き、道ゆふと松を植甲候、是一里塚の初なり。本朝世事談、巻五に、正親院の天正年中一里の行程を定め給ふ、地の三十六倉を表して三十六町を一里とす、諸國に一里塚をつかしも、標に松杉を植ゆべきやと信長公へ伺ふに、餘の木を植ゆべしとなり、畏つて頷を植ゑたり、よの木とよの木と聞きながへなりと云ひ傳ふ」とあれども、茗話の説と共に信じては足らぬなり。慶長九年台徳君が諸士に命じて、東海東山北陸三道に一里塚を築かしたのがそのはじめであらう。「駿河の富士と一里塚」とは提灯と釣鐘といふ如く、不釣合なるをいふ。

*いちれん 和女は母の形見を持つ。我が父の骨の側、夫婦親子一蓮の示しの時刻延されず(萬年草) 父母兄弟一蓮に到るべき御法を授け示してたべ(扇八景) 一蓮一具の骸骨(弁筒) これぞ一蓮托生と、慰めつ

又慰みに(冥途飛脚) 雷雲をとつて引立て、持佛堂に打込み、おおよい氣味、生きながらの成佛、未來はい一蓮一れんぶつ(持統天皇)

一蓮(極樂淨土)と同蓮華上に生れること。同一蓮臺に往生すること。「一蓮一具の骸骨」とは一蓮華座上に一體の骸骨。「一蓮托生」とは極樂淨土に往生して身を同一蓮華座上に托すること。「一蓮一蓮佛」とは一蓮の佛にまた一蓮の佛が加はつて二蓮の佛となること。

*いちあん 入道親子仰天し、一圓に心得ず何様仔細候ば(驛丸) 鳥主一圓うて(井原聖徳太子)

一圓全然。井原西鶴撰武傳備來記巻四、誰が捨子の仕合の條に、家老中ひそかに歌四章見加へられしに一圓引致さす。

*いつかい 此袴の下には鬼が住んで、いつかい口で噛みつきます(霊女) 母の胎内にある時よりいつかい世話、頭を地に付け禮をいふは知つたれども(唐船懸)

*いつかく けふの女もふさぎでばない、人置の娘を一角で頼うだ(重井筒) しゃみやみしても一角(遊樂)

*いつかける 石御器に一二杯、肝の束へ諸白をいつかけた薩摩二歳(博多)

*いつかな さあ梶原殿、目前に家來を討たせて堪忍ならずばお相手に罷らつかぬ、いかにか呼ばれれば、いづつかぬ、か怪我ござらぬと、後をも見ずして逃失せける(大猿虎)

いづつかぬ如何なるに促すつしの加つた語(いづつかぬ)を見よ。

*一騎當千 一騎當千の勇者(百合若) 一騎で千人に當る義。武勇拔群なる者をいふ。李陵答蘇武書に、破兵再戰、一以當千。北史唐書傳に、強幹一人當千。涅槃經に、一人王有大力士、其力當千、故此人稱二人當千。

*一脚長蛇 一脚長蛇の備を立て(唐船懸) 中堅と左翼右翼と兵を配り、首尾相應じて互に援け合ふ陣取。

*つぎきよう これは一きよう、この子はいとしうごさらぬか(重井筒) 興二つの面白きこと。また反語にして奇怪の意にいふ。尺素往來に、是又時之一興。

*しんせし せいせいとして申すやう(世観會談) 厳し(補正なるをいふ)の義。轉じて「うつつし(美)」

*一刻飲 探し寄つたる手先に、瓢箪大膽者、口から口へ一刻飲み、元の處にそつと置き(川中島) 息に飲み盡すこと。

*ささきさう さあ埒はあいた塗師屋殿、萬事は國より一ささき(歌念佛)

*ささきさう あとの三月二日に暇を

やるとの一札、王様の御給旨より高直な物撰つた(反魂香)

*いつしやうけんれい むのの。か、但し御前の對決か、藤孝が一生懸命と、駈け出て駈け入り(女夫池)

もとは「いつしよけんれい」一所懸命であつて、一所で生命を懸けたなり處で、庭訓往來六月七日の文にも、於三謀代相傳之分領一所懸命子拙者、不可しつしやう者説し見えある。後に説つて「いつしやうけんれい」一生懸命といひ、その意も轉じて、命に懸けて事をする意にいふ。

*一所不住 一所不住の出家の身(薩摩歌) 居所を定めて住まず、行く雲流れる水を友とするをいふ。謡曲鉢の木に、これは一所不住の沙門にて候し。

*一心三觀 一心三々わんの湯殿に、無明の紙燭を照し(扇八景) 一しん三々わんの胸の月は圓頓止觀の空にかか(百日曾我)

天台宗で成佛の秘要とする法門である。一心とは現起の一念の心であつて、これを三種に觀察するを一心三觀といふ。第一に一念の心を觀察するに、己が心にその所在を知悉することが出来たによつて空である。この空な心より現はれる萬有万法何事も皆空である。空であるが故に、自他此の別も欲障煩惱も存すべき筈のものとない。これを空觀と云ふ。第二に他面から一念の心を觀察するに、心に現はれる萬有万法何事もそとに具備して、自他彼此の別も欲障煩惱も體認される。これを假觀と云ふ。まればとして假觀では本體を尋

ねることできず、また空観では萬有乃至何事も承認されるを如何せんやである。ことに於て空觀と假觀の二邊に偏せぬ中道を第三の中觀となす。吾人は假觀と空觀を離れて中觀なく、假觀と中觀を離れて空觀なく、中觀と空觀とを離れて假觀なしである。この空假中の中觀は一念の心に存在する天眞の性徳であつて、能く觀察照了の智の性の妙諦に透徹すれば、則ち眞如の月の如しで、これを一心三觀の觀法を體得したといふのである。

うししんぶく、このさがと平棟といは一心づくで逢うてゐる(生玉)

【一心辨】何事も顧みず我と我が心を盡すこと。他から餘儀なくされるではなうて一心を盡すこと。

*うししんぶらん 一心不乱に掛観の銀に性根を奪はれて(二枚給)

【一心不乱】專心一意。阿彌陀經に「執持名號若一日乃至七日一心不乱」とありて、阿彌陀經疏に「一心不乱者、專注無散也。」

*うしせき 三つ地・五つ地・一せいの音に紛らす忍路や(酒香童子)

【一】聲は謡曲で一聲の所に一聲にあふやうに盡すのである。シテ一聲はシテ役が舞臺に登揚して第一に謡ひ出す一節である。シテ、ツシ一聲は、多くシテ役が橋がかりの時又は舞臺に登揚して第一に謡ふ。シテ役ツシ役が同時に謡ふ場合もある。

うしせき 身が一せきの臺詞の裏を食はずはしれ者(堀田延)

【一跡】跡目一式の義、轉じて自己特有の意にさぶ。

*うしそくせつだん 終に一そく絶斷の、經絡六脈絶えだえに、息の通ひ路ふつと切れ(二枚給) 一息絶斷臨終の嵐に食慾怒の火の車

【一息絶斷】最初の一息で事切れ人命の終ること。止観七上にて「息不返、即命終」とあり、定紋丸に「萬の葉(天細馬)」

【一】息絶斷最初の一息で事切れ人命の終ること。止観七上にて「息不返、即命終」とあり、定紋丸に「萬の葉(天細馬)」

うしちやうら 黒羽二重(即ち命終) うら、定紋丸に「萬の葉(天細馬)」

【つちやうらち】舞臺の「ふ」の脱落した語で、點し替なしといふ意が轉用されて、掛替な最上等の品をさぶ。井原西鶴舞(男色大鑑)卷之六(京へ見せいで瑠りおほいもの)條に「三月三日は鶴の毬打二藏までも、天王寺清水沙千などいうて遊び日なり。其上う方いつちやうらを取出して思ひ思ひに立出で、寛湖平家物語(寶永七年刊)卷之三、離波海道くだりの條に「一丁體」とあつて、體(に)と例訓が附けてある。

*中節 つかみどり屋の小丁稚が、(一女腹切)

都太夫一中が語り始めた浮瑠璃で、曲調悠揚に哀れげな中音で語るところに妙味があると云ふ。都一中はもと本願寺派の僧であつたのが音曲家となつたので、その曲風は伊藤出羽條から岡本文彌・都越後を経て傳はつたものである。近松と一中とは關係がなや深く、心中天細馬の「迷ひ行けとも松山云々」、長町女腹切の「春は梅にしろいろの花さく山に山めぐり云々」など、一中の浮瑠璃を用ひてゐる。

*うしつぎぬ (持統天皇)

【五衣】昔時婦人の衣服。もとは袴五つ重ねたのを云つたのであるが、後には一枚で五枚がたむに見えるやうに仕立てたのを云ふ。又三枚重ねたのも五つ衣と云うた。若東要領抄後附に「五衣、これは古の重桂なるべし、或は重ねぬ時もあり、時宜によるべし、こゝにいへる五衣は、表何色にても同じ色なる五つ重ねて、裏は一つ一つの平絹を附けたり、

又色變りして、五つながら別色なるもあり、重ねやう互に色を替はぬやうに重ねる事、古來の有様ならなりと承りぬ、色がはりの時は裏は古襦袢ならなりと承りぬ、五つながら同じ衣の時は表も皆同じきなり云々。

*五つ道具 引馬に五つ道具、乗物の戸八文字に開かせ、布袋乗に乗つたるは、梶原平次景高なり(倉橋山)

身分高き武士が供廻を連れて外出する時、列中に槍五本または立巻・打物槍などの五本を立てること。

うしつぎ 三つ地・五つ地・一せいの音に紛らす忍路や(酒香童子)

【五地】謡曲で小鼓の手の名。謡ひ方に五つ地の所は五つ地にあふやうに謡ふのである。

五つものたなつもの 庭に五つものたなつ物積む蓬萊の島田氏(宵庚申)

五穀。たなつもの「はたなりつもの」(田成律物)の略であらう。稻を云うたのであるが、また田畑に出来る物をも通稱す。五穀は、楚辭の註に、「稻・稷・麥・豆、孟子の註に、「黍・稷・燕・粟、月令に「黍・稷・麻・麥・豆」業門に「黍・麻・粟・麥・豆」。

五つ常の道 御狩車のいつつなを、五つ常の道しげや、惠の露に轟きて(鶴丸)

仁義・禮・智・信の五常。

*五緒の車 間の東は玉敷の、御垣に波か、ふ五緒の車、烏丸兩が室(堀川波鼓) 御狩車のいつつなを、五つ常の道しげや、惠の露に轟きて(鶴丸)

五つ緒のついた車で、御所車のことであるといふ。徒然草第六十四段に「車の五緒は必ず人によらず、程につけてきはむろつかさ位に

至りぬれば、乗るものなりとぞ或人仰せられし。堀川波鼓のこの文につきまは、寺綱幸云々」をも見よ。

*うしつぎぬ 春樂もとより一徹者(冷泉節)

【一徹者】一筋に思込んで動かぬ人。

うしつぎぬ 何にたとへんいつて船、沙風寒く吹通ふ(女橋)

【五手船】五挺立の船をいふのであらう。奥儀抄には、十人にて船を船であるといひ、八雲御抄には、伊豆國より造出せる船であるといひ、本居宣長は、伊豆國より造出する船として手の字をこゝへすと云つてゐる。

*いづな 何條その小童腹法飯綱を行ふとも、變化鬼神も討て法飯綱(孕常盤) いづなの三郎(國志)(十二巻)

【飯綱】信濃飯綱山の飯綱大明神は俗に狐を祭つたものとされ、中世飯綱山の修験者が飯綱の法と稱して、人を惑はしてゐた者があつたことから傳播して、狐を使ふ妖術を飯綱といふ。【飯綱三郎】は信濃飯綱山に住む天狗の名で、飯綱にちなんだもの。謡曲「鞍馬天狗」に「飯綱の三郎・富士太郎」。

*うしは そもそもの歌仙といひば、中頃四條の大納言公任といひば、人えらび置かれし人人なり(百日曾我) 一陽を以て衆陰をすぶるといつげ、我一身を以て數萬騎の軍兵を従へたもつ大將(國性齋)

【うへは(言)のつまつた語、うへはを「うしは」といふ例は謡曲に甚だあり。

うしはといふ例は、京の客今のあらまし聞き給ひ、欺して言ふとは、そも知らず、心のさげしむばかりかば、

家中一がいする人の、世間の沙汰を如何せん(堀川波鼓)

【一杯爲る人】残りなく行きぬぐる人。

【二百三十六地獄】(冷泉節)并筒(弘慶殿)地獄は梵語奈落(Naraka)の義譯である。

大地獄には娑婆・屍羅増・鉢叉増・烈父増の四地獄四方にあつて合計十六地獄ある。十六地獄にはその各地獄に等活・黒繩・衆合・號叫・大號叫・炎熱・極熱・無間の八地獄あつて合計百二十八地獄ある。これを根本地獄の等活・黒繩・衆合・號叫・大號叫・炎熱・極熱・無間の八地獄を加へて總計二百三十六地獄ある。

【一腹一生】一腹一生の兄が親の敵を討つと申すに、知らぬ顔をする人間や候ふべき(百日曾孫)

【一本】味。ぐる。

【一腹一種】時にあふみや世に出雲(用明天皇)

【おのれが弟の傳三郎今】までおのれら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、天道の恐しさに知らせますると告げし故(卯月糺)

【出雲】竹田出雲をいふ。用明天皇職人鑑が上預された實永二年十一月には、竹本筑後守は退隱してゐたので、竹田出雲が代つて座元となつての最初の上演であるので、世に出づを出雲にかけてその將來を祝した詞である。出雲は淨瑠璃作者ともなり、三好松洛・並木千鶴と共に假名手本臣殿を著した人は人能く知る所である。實永六年十六歳で没した。「あふみ」茂の顔見世をも見よ。

【武に富める(五人兄弟)】

【さで】は感動詞。「そよは」そよよの約。さやもうせよ。

【紋、肥前佐賀の御居城(藤原歌)】(賀古教信)

【賀古の丸】紋所の名(佐賀城主・鶴島信濃守綱茂の徳印)

【下すや釣の絲櫻】(賀古教信)

【枝垂櫻の稱。大和本草に「枝長く絲の如くにして下り垂る、花うらはし、彼淨櫻より花稍遅し。】

【いとしばい】いとしばい、川様お一人にとどめた(真途飛脚)習はせ給はれぬ旅疲れ、よろづさこそと推量られ、御いとしばく候なり(十二段)親御達がよく知つていとしば(女殺)頼に毛抜もあてる者が、いとしばげに女郎しゆ弄つて何の男(壽門松)いとしばなげに、紙治さんとわたしが中さほどにもない事(天細鳥)

【いとほし】傳の「ほ」と「し」が轉換した語で、大體を「きん」茶釜を「ちやまが」なるといふ類である。いはし。ふみな。あはれな。いとしばげは「いとほしげ」、「いとほなげ」は「いとほしなげ」である。

【薄】心細しと絲薄(用明天皇)

【絲竹】絲竹詩文和歌の道(錦丸)竹の道暗からず(十二段)

【絲】は絲を張る樂器で琴の類。「竹」は笛



【九】杏

【いとなし】のべも亂れて雨と降る涙いとなき風情なり(三世相)

【いとまなし】隙無の略。古今集戀歌五の部に「あはれともらしも物を思ふとき、などか涙のいとなららん」と訓詁に「いとなし」無涙の義也云々。

【いとびん】絲鬢奴の剃頭(并筒)提灯を持てる月に絲鬢奴が若白髮(頃八景)

【結髪】徳川時代初期より中頃まで流行した男子の結髪であつて、頭の髻を剃下げて兩の鬘を細く狭く纏ひ、引結めて結うたものであることが我衣に見えてゐる。好色一代男二に「けんぼふといふ男、其頃は捕手居合はやりて、世の風俗も糸鬘にして、くりさげ二すち鬘の鬘、上髻纏して袖下九寸にたらず、染分の組帯せいからげの長脇差」。

【いなおほせどり】いなおほせどりも音をいれて、野邊の刈萱・軒端の萩、馬のまぐさにかひのこす(丹波興作)鳥のうちにいなおほせ、妹春教へし手習の、戀の墨色あかぬけて(天鼓)

【稻葉鳥】古今集歌傳に入つてある三鳥の一である。鳥林子に「鳥のうちにいなおほせとほせ、妹春教へし」と書き、日本振袖始に、「かの鶺鴒を庭來鳴鳥、庭叩鳥、妹春教ともいふ」と書してゐるを見れば、鶺鴒のことと云つてゐることは明である。鳥林子のやうに鶺鴒とした説は、藤原定家や加茂眞淵などもその説である。按ずるに、安齋雜考・下巻に、「吳竹抄第十に、近年ある人安藝國にまかれりけるに、はたきありてなきけるを、女の有りけるを見て、いなおほせ鳥といひけるを聞きて、など此鳥をいなおほせ鳥とはいふ

ぞと聞ひければ、此鳥來り鳴く時、田より稻を煮ひて家々にはこびおけは申すなり云々」と見え、秋に田の畔などで鳴く鳥であらう。鳥林子に「母與作にいなおほせどりと云うたのは、古謡にいなおほせどりを馬であらうと云うた其縁によつたものである。

【いなせ】兄弟富士野へ赴き、けふ二十日に餘れども、兎角いなせのあらざれば、いばしまどろむ隙もな(世繼曾我)

【いなせ】いなせの便りも給はぬば、かれがれ聞き、阿古屋といへる遊女に御親しみ候か(出世景清)いなせの返事(辰鹿香)

【いなやう(否應)】また轉じて安否。「いなは否(せ)」は諸の義である。萬葉集代匠記卷之十六上段に、萬葉集の歌句否邊薛羅に註して、「日本紀に諸をせとあり、然ればいなもせると讀むべし」。錦木(寛文頃の作)卷五に、「いなせ。いやともおうとも義なり」。

【いなづま】上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅(國性蓋)家來に乗抜け稲妻走り(會稽山)

【稲妻】稲妻が電光のやうに迅速なことを。謡曲・熊坂に「おつかおつかめ取らんとすれども、陽炎稲妻水の月かや、姿は見えぬ手に取られず。稲妻走り」と、電光の閃くやうに迅速に走つた。

【いなばきむしろ】時宗はいなばき庭引ばけ、上には菖蒲眞菰草(虎が磨)

【いなぶねの】如何なる武士もいなぶねの、押すに押されぬ此道止ませ給へといひければ(女護鳥)

【いなぶねの】いなぶねのといふは、武士のいなぶねのは、武士もいなぶ(不尊)をいな船

にかけ、船の縁から押すに押さぬとつゞけたのである。

***いなり** 稻荷は五穀のかみ賀茂や(鳥帽子折)

稻荷社は大御食津神を奉祀したもので、大御食津神は神代に食物のことを掌れる神である。故に稻荷は五穀の神を上賀茂にかけたのである。俗に稻荷を狐としてゐるのは、大御食津神の食津が狐にその首似てゐるより誤つたのである。

***いにけり** 見て參れとの刺をうけ、狩にいにける装束は(松風)

「いにけり」は去で、此處を去つて彼處に行つたといふ意。異本「伊勢物語」に「春日の里にしろよとして狩りにけり」。謡曲「杜若」に「春日の里にしろよとして狩りにけり」。

***いぬ** 我が出家はいぬめが仕合はせ、とうとう歸れ(大鏡) 大鏡のいぬめらに懲果てて死ぬる身はいはば、面自害とも心中の外的心中ぞや(卯月調色)

「いぬ」(解度)の意を含む對稱代名詞(汝)の轉。根柢子のこ、の文は犬をきかせていらたのである。

***いぬ** 天皇をかまくまふ由いぬ入れて聞き知つたり(持統天皇) この在所は大阪からいぬが入り、代官殿から詮議あり(冥途飛脚)

「いぬ」犬とも書。まはしもの。しのびもの。開議。榮隆比事(宋・桂萬榮撰)卷中に「王蜀時有齋僧武者、主事尋問、乃重遊之職也。所管百餘人、每人各養私名十餘輩、呼之曰狗。」

***いぬおふもの** 笠懸・流鏑馬・大追物(大藏虎)

〔大追物〕馬上鑿目の矢を用ひ、犬を追射する武技である。馬場は弓杖七十枚、四方に大小繩を張り、ともに輪槍に懸らす。小繩は馬場の正面にあつて徑弓杖一枚、大繩は其外にあつて長さ二十一尋、其周圍に砂を敷く。これを鏑際と云ふ。射手はこの内に馬を乗入れ、大繩の方に向つて矢を射る。その時に犬放の者小繩の方に犬を入れ、鏑見の報を待つて犬を放つ。射法は大が小繩内から出て將繩を越えんとするを、其鏑際にて射るを本儀とする。又犬が鏑際から外に走出れば射手は馬場中を追廻し、犬の傍に紐着つて射る。矢所に弓手押、交馬手、馬手切等の歌聲ありて實に驚がある。射手は三十六騎之を三手に分つ。犬は百五十四匹、犬の頭、尾、踵を射らぬ法である。役人に射手(弓を射る者)、鏑見(射手の射儀優劣を定めて賞否を決する者)、喚次(鏑見の告を得て其名を唱へて日記付に報ず、鏑振(響を振つて日記付に知らず者)、日記付(射手の姓名及び矢數を録する者)、圍振(圍を振つて射手の順序を定める者)、犬放(犬を放つ者)、河原者(犬を牽き又雑事に従ふ職者)などがある。

いぬざくら 打つとも去らじ退くまじ家の大櫻(并筒)

〔大櫻〕櫻の一種、松岡立選撰、櫻品に「大櫻」花葉とも常の櫻に似て小花簇生し、種をなす、花は觀るに足らず、……實六月に熟す、其色黄にして味ひ杏仁に似たり。

いぬむらひ 逃吠の犬侍應病應病とぞ笑ひける(鳥帽子折) 主の威光を吠え廻る犬侍、棒をくちらへと打つてかか(愛徳太子)

〔犬侍〕武士を罵つていふ。

戌の顔見世 既に今年酉もたち、戌の顔見世朝木戸を、曙深く提灯

の、影きらきらと初霜の(二枚繪)

〔戌〕とは戌の年のごとで、即ち寶永三年に當り、一月一日から始め、次の年の役者の座組はこの狂言で定めた。されば戌の顔見世は即ち寶永二年(酉年)十一月の顔見世であるから、影きらきらと初霜と云つたのである。さて寶永二年十一月の顔見世は、用明天皇職人鑑の顔見世芝居であつた。今昔撰年代記(享保十二年刊)七卷に、「其登寶永二年」かほみせ淨るりといふをはじめ、用明天皇職人鑑作者近松門左衛門をかへ、太夫竹本筑後掾座本竹田出雲と看板並べ、三段目かね入の出がたり云々」とある。外題年鑑に用明天皇職人鑑を寶永二年三月の上演に書いてゐるのは誤である。

いぬ 眉間を横に薙き据みられ、いぬにどうどうまろびけり(今川了俊) さんぶと切つて打落せば、いぬあにどうどう臥したりける(堀川波鼓)

〔大居〕犬は常に前脚を立て、後肢を折つて蹲居するものなれば、以てそのやうな坐り方をすることいふ。平家物語考證(野宮定基編)卷之十一、つぎのぶよまごの條に「大居とは左右の膝を前に屈して地に跪するを云」。

いぬむ 槌の子抱いていれついで、若夷に掛(壽門松)

〔稻荷いぬ〕の正月詞。蓋し正月元日に懸掛すといふは病床などに給らぬしから、祝ひの言葉には稻にかけていひ、起きぬを稻擧ぐといふ。和訓栞「いぬの條に「正月詞に懸るをいねむ」といふは稻擧の義也」とへり。

いねのとの 浮邊の螢・いねのとの、影かあらぬか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の、雪のな振袖ちらちら

とな(卯月調色)

〔稻穂〕稲妻。電光。俗に稻妻のよく光る年は稲よく實ると云ふ。蓋し農家炎旱の日に雷雨を得て、稻の實ることを思ひ望むより出たもので、實るをばらむとも云ふ。稻妻は稻の夫の義で、稻の殿と同義である。昔は夫も妻も「つま」と云つた。續撰義・秋部に「稻妻の頭で一束の句に、「獨り居て留守物談し稻の殿」とありて、標注七部集(權庵西馬述)、この句の頭註に「稻の殿とは稻妻に同じ」とある。片山松齋撰北寛雅話に「萬葉全書云、大妻前後有電、早稻薄收、晚稻必大熟云々。稻の實のるをばらむと云ふに付て、電を稻妻とも稻殿とも云へり」。

いこのころ 町のいのころ野良犬の雪駄くはへて振る如く(虎が懸)

〔えのころ〕ともいふ。「いぬころ」(犬兒)の転。

命がらり 山城屋といふくつわへ中年四年二百兩 命がらりに身を賣りて(旋盤)

命をさつぱりと差出すこと。「がらり」は長町女親切に「がらり二十兩、ま一年切まし居なりにおれ借銭もまづ其分」とある。「がらり」と同じ語で、物を隠さないでさつぱりと投出すさまに云ふ。

いのちげ 白き鹿の命毛を筆に作つて繪を書けば(五人兄弟) 筆は鏡に動かが故に、命毛日を以て數ふといへり(持統天皇)

〔命毛〕筆の鋒毛。筆の穂。「筆はするどに云々」とも見よ。

命のかい 「かひ」を見よ。

命の玉 皆朱が大事の命の玉、縮み

込む程蹴付けられ(女程)

翠丸、俗に「男の翠丸、女の乳房」は是所であるといふ。和漢三才圖會卷十二、支體部、陰囊の條に「陰囊中有二玉、此與結輪、男子童根也。」

*いのちみやうが 命冥加の女め、たとひ火を通れしとして、そもや生けて置くべきか(釋迦) やれやれあぶなや、命冥加な孫どもや(羅摩三)

命冥加目に見えぬ神佛の加護に、つて命の助かると。不思議に助かる警悟。

いはうじ 「いむらじ」を見よ。

いはおこし 身より餘りて涙川、堰きも止めよ岩おこし(生玉)

〔岩粧敷〕おこし、こめを若石の如く鉢で固めた菓子。この文は、大和橋下の道頓堀泥の海に踏み迷ふるなれば、「堰き止めよ岩」を道頓堀の名物「岩粧敷」にいひかけたのである。

〔國花萬葉記(元祿十年成)卷五之三、浪花名物寄の條に「若おこし大江橋北つめ、道とんぼり、ひのうへ。」

いはがきもみぢ 来る人稀に奥山の、岩がきもみぢ染め亂れ(川中島)

〔岩垣紅葉〕岩垣の蔭にある紅葉。古今集秋歌下の部に、「奥山のいはがきもみぢ散りぬべし、てる日の光見る時なくて。」

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

いはくすぶね 「あまのいはくすぶね」を見よ。

四に「他町の使者の行事への祝儀のためが岩國半紙五折に金子百疋云々」

石清水浴びせません 茨木屋より嫁入とて、婿は八幡のいばし水、あびせませんと井筒屋の亭主は送る(流鏑)

〔流鏑〕八幡の若者は石清水(勇山八幡宮)にひつづけ「浴びせません」は浴びせませうとふふと、當時行はれてゐた結婚の水祝をきかされたのである。水祝とは水掛祝であつて、始めて妻を迎へた人に水を浴びせるといふことをして祝したたのである。西鶴撰・武道傳家記・卷之二、身八し破る落着の側儀の條に「此家に入嫁の習み數多なり、其中に篠原文助といふ入嫁なり、諸拜領母といへる人肝煎られて、極月二十六日に文助舟右衛門方へ入りて祝言の事始め、目出度その年も暮れて明くる正月三日の事なるに、若き者集りていざ文助に水掛祝といひ出れば、各進みて無用といふ人ひとりもなし。水祝は天和元祿間に盛に行はれたと見えて、天和三年十二月二十四日及び元祿三年正月五日の町觸にこれを禁止することが見えてゐる。

岩代の松 岩代(今宮)に懸れる下り藤、嵐になやむ松に懸れる下り(今宮)

〔岩代〕岩代(今宮)に懸れる下り藤、嵐になやむ松に懸れる下り(今宮)

いはなし 千代の昔むす岩梨の、岩にも花の松の實や(嵯峨天皇)

〔岩梨〕松林若石の間に自生し、小灌木でその實の味甘美である。

岩橋 かけてぞ通ふ岩橋の、葛城山に着きにける(浦島) 君が忍びの御幸道、打渡したる岩橋も、夜の契の便りかや(弘徽殿) いばはしの夜

の契も絶えぬべし、あくるわびしき葛城の神(百目曾我) 葛城の久米の岩橋夜ならで(國性)

岩石でなつてゐる橋。昔時彼小角といふ行者が葛城山一宮主の神を役して、葛城山から金峯山に岩橋を架けようとして、まづ大和國久米川に岩橋の工事に取掛つた所、葛城の神己が容貌の醜いを恥ぢて、夜のみ出で、工事に従ひしかば、小角怒つて葛城の神を縛したので、工事半ばにして成らなうといふ。水鏡文・武天皇の條に、「役行者大峯と細獄と此葛城の峯とに、岩橋を渡せと、この鬼神どもに言ひしかば、夜々岩をはこびてけつり。調て既に渡ししかば、行者は心元ながりて、晝た體を顯はして渡せと責めしを、一言主の神役體の醜き事を辱けて猶々ばかり渡し侍りしかば、行者怒りて投入れてんき。この一言主の神を縛りて谷底に投入れてんき。拾遺集・卷十八、雜賀部、藏人左近の歌に「いはしき葛城の神」「かつらぎの神」を見よ。

*いはひづき 大事の甥が出世の門、祝月を心懸け愛宕かけてののぼり(舟女腹切)

〔祝月〕正月五、九、十月をいひ、初一日には多く善事を修し神社に参詣したのである。黒川道結撰・日次紀事・九月初一日の條に「祝月。自今今日至九日、武家并地下良職各善し。祝月今日互相賀。俗曰祝月。凡一年中正・五・九月凶月也。故忌之却謂祝月。各修善事。今日神社男女奏詣。按ずるに佛説地藏菩薩發心因緣十五經に「爾時閻魔法王重告大衆。我以三閻浮日月所行正・五・九月長月十、殊向三閻浮云々」とあれはこれらから起つたのである。

いはぶね 風はなけれど蚤小舟天の鳥舟いばぶねの、空走り行く如く

にて(國性)

「いはくすぶね」を見よ。「あまのいはくすぶね」を見よ。

*いばゆ 野飼の駒のやさしくも、古郷の風の北にいばえていななけば(用明天皇)

〔嘶(いばゆ)〕馬聲の響。いな、く。文選古詩に「胡馬依北風」。

*いばらきどうじ 渡邊綱こそは天城童子が片腕、只一太刀にうちわも内輪(雪女)

〔天城童子〕天木童子とも書く。羅生門で渡邊綱に腕を斬落された鬼神の名であつて、酒吞童の部下である。この鬼神後に老妻に化けて綱から腕を取返したと云ふ。天木童子に天木屋幸繁の次木と、酒吞童子の童子と相合し、天木屋幸繁について、その事件を仕組んだ葉村作・傾城酒吞童子がある。

いはらじ 「いむらじ」を見よ。

岩井半四郎 去年のおしまの心中の、其の井筒屋にわれが今、重井筒と篠塚に、言はれいばはるの半四郎(重井筒)

二代目の岩井半四郎を云ふ(初代の半四郎は元祿十二年に歿した。大阪道頓堀歌舞妓住居の座元となり、若衆女方に物して好評を博した名優であつた。役者三昧條に「女方若衆方を動かすまされ、當願見世より角前、似合まして、まぞや古半四郎若の蔭にて御満足と存するは、打撲りての座本云々」。

*いひられ 伴之丞様へたつた一言いひいれでつい御祝言濟む事(繪本)

三三 いひいれののみつきを以て姫宮

三三

御迎の爲(日本武尊)

「吾入申込み。婚約の申込。」

いひおち 申譯致すほど皆言落ちにて候(ども)(出世景清)

「吾言言ふほど非に落ちること。言ふだけ懸くなること。」

*しひじよ 親の言ひじよを背くかと叱つても聞き入れず(今宮)

*しひしらく 銀ぐれる遺手に水くれるとばわる(こう)など、笑ひをしろに、いひしらげ、先を拂ひて立歸る(反魂香) 候へても(こ)へられず、言へばいふ程いひしらげ(大羅冠)

「吾白言華興醒む。言華黄色になる。」
いひたいがいしにいふ
「が」を見よ。
いふと 伺候の諸武士いふとうし(俄)に式法恭しく(文武五人男)

*いぶり 意見をすればいぶりを出し(卯月紅蓮) 心に疵を持つたれば、いぶりもならず捌れられず(萬年草) 心すらすぶりしやりのいぶりぶり(獨樂(松風) ああいぶりさば、いづあを海苔もかたのりと、身のさがらめをな(り)そや(出世景清)

「誰げぶたり意より轉じて、氣まづること。不興。心に不満を抱いてぶりしやりとすぬること。」
「いぶらさ」の「い」は接尾語。出世景清のこの文は、氣まづらぶりしやりとすぬるか

らは、何時逢はるや青海苔にひひかけ、そして逢はるも難いをかたのりにひひかけたのである。「いぶらぶり獨樂の「いぶら獨樂」はその候を見よ。」

*いへづと 待て暫し、母が追善信玄へのいへづとせん(川中島) 續きて見ゆる八十島を、異國の人の家苞に教へてたばせ給へよと(國性爺)

「家苞」土産物。鳥林本「節用集」に「家土産。和訓森に」とつと。萬葉集に「葉の字を訓め、葉の戦なるとし。山つと湧つと進ゆきつと田舎つなどは、其處の土産をいひ、手向つと家つと都つとなどはその土産を待て來んする所をいへ、共に通へり。」

*家の子 折こそあらめ島上郡高槻の家の子(女殺)

武家の庶子(分家)一族などの者を云ひ、また家親を云ふこともある。王朝末期家族各地に超つて兵馬を賣し土地を領する者多く、その大なる者を「大石」、小なる者を「小石」と稱し、その民族義務するに従ひ、本家を總領と云ひ、族親を家の子と稱することとなつた。
家のさだつ
「さだつ」を見よ。
*いほはた いほはたたてしはたおりや(用明天皇)

「五百箇」いほはたは多数を云ふ。多くの樹。萬葉集卷十に「たなはたのいほはたたて。」
庵の内に二つ頭 庵の内に二つ頭の提灯は竹の下の孫八左衛門(扇八景) 紋所名の下(雌龍雄龍の二つ頭如如意珠の條に、「庵の下に雌龍雄龍の二つ頭如如意珠を守り遊びて、雲を抱くも天の帝の末孫の翠竹の下の孫八左衛門」とあれども、夜討首殺(古活字版)に「いほりの中にあつたかららの

舞たるは駿河の國の住人てち天わりの末孫

「庵の内に二つ頭」



竹の下の孫八左衛門」とありて、この紋繪が彫せてある。

*いほりもかろ 庵に木瓜附けたる提灯こそ祈經と見し(いかに(百日曾我)



「瓜木庵」

「庵木瓜」紋所名、庵の内にいほりもかろと申す。伊勢物語に「その帝の皇女にたかり子と申すいほりもかろ」と見えてゐる。昔は湖點を附けずに多く書いたのである。いほりもかろは「いほりもかろ」となつたのである。いほりもかろは「いほりもかろ」であつて、竹取物語などに多く見えてゐる。

*いまだうしん そもしも見れば今道心、さそつむりが冷えさうな(俄) 俄に剃髮仕り武藏坊辨慶といふ今道心、ち御法施に御首を入れさせ給(吉野忠信)

「今道心今新しう善提心を發起した者。新しう佛道に歸依した者。」

*いまは 母様の今はの時、繪合が事は父様が預つた受取つた、心安う往生あれと(千正犬)

「今著し今は限りといふ意。死際。臨終。いまふるな 何と濁事は軍法智略の根元根本ではあるまいかと、頭を振る舌振る今ふるな、鈴振る様にいひければ(千正犬)

「今當様形現今の當様。當様那は釋尊十六弟子の一人で、説法に巧妙な雄辯の人であるふるな」を見よ。

*いままるり いま丸りの山路といふ草刈はいづくにある(用明天皇) (今著)新著。新著者。

*いまめかし 心底聞かんとありければ、あゝ今めかし、何事が存ぜれども(龜山姫) 申し母じや人、今めかしい申し事ながら武士の釜の水で育ちし此半兵衛(資房申) 今めくやうな。今更らし。

いまやう 御馳走の若侍今様を誦ひ舞ひ(冷泉節)

鰻の蒲焼山椒味噌、兼平とは木曾の御内に今井鯨、酒もりにかくれなき一騎當千の御肴(女権)

「今井鯨」を意味した語に此名のものがあつたら。大矢筈(延寶九年刊)巻四に「此秋より喰とまつる今井鯨、さても種々の辛い世中」二、の文は、白餅に城持をかけ、深草の縁から鰻に掛けて舞餅、小豆の一種に大納言といふものがあるので小豆餅、唐人唐土に玉蜀黍をかけ、隨に茶、今井鯨に兼平の氏をきかせたのである。兼平とは木曾殿の云々をも見よ。

いみあき 日嗣の玉の男子皇子やす

「と」降誕あり、蓬の矢事、七夜の御賀、今日百二十日の御忌明、ことに山王権現に御母方の御願ぞと(松風) 六日だれの忌明の誕生日の食初のと(鏡映天皇)

「忌明」産の麟れの終る日。出産から忌明までの日數につきは、女重寶記(元祿十五年刊)巻之三に「産のけがれ父七日、母は三十五日すげに候え、松屋筆記卷十四に「産息。黒谷上人語燈錄に、産の忌よくかて候ぞ、又いみあきかて候ぞ、答、佛教には忌とすふことなし、世間には産は七日又三十日と申すげに候、いみあき五十日と申す」と見えてある。この文に百二十日とあるは、産兒百二十日目に食せしむることを忌明にさひなしたるのである。女重寶記卷之三に、「くひぞめのこと百二十日め也」。

いみあき 「さくららのいみあき」を見よ。

いみあき ひとへに義經が謀いみじきによりてなり(出世賢流)

いみあき すぐれてゐる。雅言集覽に「いみあき」

いみあき いらたかじゆす

いみあき いらたかじゆす

善惡とも甚しき所にいへる詞也、たゞ此詞のみいも前後の文にて知らる、也、いみあきうれし、いみあきかなし、など上とそへてさへるはいふに及はず、下にそへたるもあら。

いむけのそて 次の幕より八田の知家伏見の鎧烏帽子掛して、射向の袖をゆりかけ(蛙合戦)

「射向」神言を射る時向ける袖の義。鎧の左の袖。

いもうとちよらう 今日突出の妹女郎唐琴を引連れて、揚屋揚屋を顔見世と(蛙合戦) 妹女郎・花車・禿・引舟など入替り立替り(天讀虎)

「妹女郎」遊女園で最も立替りの者が互に姉妹約束をして助け合ひ、年長者を姉女郎とし、年少の者を妹女郎とす。妹分の女郎。

いもさし 長柄の槍おつ取り、穂先を揃へてぐつくと、芋刺串刺滅多突き(室町千疊敷)

「芋刺」芋を竹串に突刺したやうに揃て人を突刺すこと。

いもせ そなたは妹春を忍草、身は兄弟を思草、歌念佛、祕藏娘の琵琶の姫、右馬の允景久と妹春の縁のいひなづけ(蛙合戦)

「妹兄」妹背とも書く。夫婦。日本書紀仁賢紀に「古者不言兄弟畏幼、女以形男弟、男以女稱妹」。周禮疏に、「謂夫婦爲兄弟也」。

芋搦坊主 親より子のよい、芋ほり坊主と、笑ひて興に入り給ふ(三國志) 扱は刀を奪はん爲の偽な、芋ほり坊主め(娘)

芋を搦るより他に何の藝能もない坊主、即ち

芋を搦るより他に何の藝能もない坊主、即ち

無學文官の法體の者を貶稱する詞。
いもぬ 岩木なられば若君も心動くばかりなるが、いもぬ許さぬ旅枕、貸すもよしなしもたいなと(十二段)

「妹居妹」居る義。女夫同家。

いばあもの 屏風の上顔を出せば、いばあ悲しや思々しい、ちやつとおいで下さんせ、いやな物によう似た(冥途飛脚)

「いばあ」否で嫌義。「いやな物」とは、屏風の上に出しただ首はさながら獄門にかつてゐるに似たからである。

いやはあ ことばならん身の果、いやはあ、なんと面白い事かと、ひよろひよろ正體なかりけり(旋盤)

能樂にて鼓打の掛聲である。ヤヲハの間の時に鼓打のイハハの掛聲を聽いて、謠手は次の文句を踏出すのである。謠曲・兼平に「こは何とならん身果、せんかたもなくあきれば」との間は、愚態であつて、ヤヲハの間ではない。泥酔してイハハを出露目に言ふ鼓の口調子、更に妙味を覺え。

いやる 七左衛門殿もいやらぬ事ばあるまい(女殺)

上方調で「言はるる」の訛。

いよし 袖から渡す一結び片假名のの見ゆる(三世相) いよしまでござんせの春永に、いよしも變らぬ御けんまで、逢瀬を契る餅は杵(夕霧)

「いよ」彌に、語意を強める助詞「し」の附したるもの。「いよしま」を其字形の相似より誤つたものであるともいひ、いよしま、ます

「いよしま」を其字形の相似より誤つたものであるともいひ、いよしま、ます

「いよしま」を其字形の相似より誤つたものであるともいひ、いよしま、ます

「いよしま」を見よ。
いよしごけん いよしも變らぬ御けんまで、逢瀬を契る餅は杵(夕霧)

いよし御見と書いたるは、絆のたねが花薄、ほんに誓文いとしまに、幾夜の夢を結び文、かた様まゐるはなよりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの歪色見えて、わきて泉の思はくば、たゞ逢ひまして逢ひまして、またのいけんをまつかし(女腹切)

「御見」御見「いよし」は前條を見よ。「ごけん」は御見の略。いよしま御目も致した上。いよしま御目に懸りましてこのへ。増補松の落葉巻二文ことばに「まことに文けねやの友、いよしごけんと書いたるは、ほだしのたねが花すき、ほんに誓文いとしまに、幾夜のゆめを結び文、かた様まゐる梅よりと、思ひまゐらせそらくと、わけの歪色見えて、わきて泉の思はくば、たゞ逢ひまして逢ひまして、またのいけんをまつかし」。

いよつるごさる(百日曾我)

「いよつるごさる」(百日曾我)の訛。

いらか 七寶七重の宮殿いらか(塵土)

「塵土」塵土の瓦。「いらか」は「いらか」の轉じた語で「いらか」は倭名類聚抄に「塵。伊路久都、俗云伊路古」と見えてゐる。さては屋上の瓦が騒々たる様より出た語である。

いらたかじゆす いらたか球數押もんで(凱陣八島)

いらたかじゆす いらたか球數押もんで(凱陣八島)

いらたかじゆす いらたか球數押もんで(凱陣八島)

いらたかじゆす いらたか球數押もんで(凱陣八島)

いらたかじゆす いらたか球數押もんで(凱陣八島)

立て、いらたか球數さらりさらり

と押採んだり(女殺)

「いらたか球數」修驗道にて、最多角球數或は長角球數と書きて、算盤珠のやうに角の立つた扁平な球をいふ。いらたか

は、翻譯名義集卷七に、球數を阿明陀迦と云ふと見え、世帯百談に「いらたか」は、あらたかしの轉で「あらたか」は念珠の梵名であると見えてゐる。謡曲・葵上に「押採んで」。附虚無僧元祿九年刊)卷之二にも、祈禱所の貧懸院の行者が兜巾を被て、いらたかじゆすを採んで、美女おゆりの戀病の祈禱をしたことが見えてゐる。

*いらふ 手を出し手を引き唐猫の、おきないらふ危(や)今(官)

いらふ(弄)の訛。いぢぢ。もてあそぶ。源氏物語に「な事に目のみまがひららふ」とあれば、色々目らつたりとらふ意から轉じたのであらう。

*いらへ 暫しいらへもせざりしが(女腹切)

「いらへ」應と云ふ動詞の轉成名詞。答和訓栞に「いらへ。應答をいへり。よて眞名伊勢物語に報の字を用ゐたり」。

いらむし 蜂やいらむし火取蟲(賀古教信)

「可憐」鑿翅類に屬し、長さ五分許、黄色で翅の開張一寸餘。幼蟲は八分許に成長し、體太く黄緑色で、節があつて多くの刺毛を有し、柿葉・梅などの葉を食ふ。

*いららぐ 筋骨奇けののしれば(井筒)

「奇し」らだち怒る。

*いりあひのかね 入相の鐘に散りゆく花(賀古教信) 入相の鐘陸じき

夕(倉橋山)

「入相の壽太陽將に西の山の嶺に入らうとする時を入相と云ひ、寺院では梵鐘を鳴して日没時の鐘を修するの、この鐘聲と日没時とを列ねて云うた言葉である。

いりこ 揚屋にいらこ串鮎、相間相客、宿屋おろせの附届(雪女) 間夫の忍びに聞いたこと、このいりこ

とやらんいふ物を梯子にせまいか(加増増枝)

「海老」海鼠の腸を去り、茹で、日に乾したものを「海老五枚羽子板」の文は、揚屋に入りて海鼠にひかけ、また加増増枝のこの文は、海鼠を繩に懸いだものを、結び合せて梯にせうではないかといふ意であつて、この後の文に、鮫鱈、蒲餅、鱈、太刀魚をいへると共に料理の品をきかされたのである。

いりさけ へちまよくと御いり酒、甘い事ちやと喚きける(淀雄)

「煎酒」酒に醬油または鹽節を加へて煎じたもので、膽・刺身などに用ゐる。

*いりへ 徳兵衛殿はいりへと聞く、かう致せば後の爲まとも用聞かう爲、さあ判ななされよ(重井筒) 總じていりへ入婿に小言のあるはならひなれど(卯月紅筆)

いりえ入縁の訛。入型。武道傳家記卷二、身體破る落着の圓の條に「此家に入縁のぞみあまたなし」とあつて、「入縁」に「いりえ」と例訓してゐる。いりへは入嫁の約ではあるまい。

*いりまい 清十郎といふ子を待つて、老の入まへ暮好き(歌念佛) 妹千代も大阪にれつときとしたる婿と

つて、身の入まひば上田の田島の世話をやきやめば(菅庚申)

「入米」訛つて「いりまひ」いりまへといふ。もと米の收入をいふた語なるが、轉じて廣く收入の意。年貢米四斗俵を計つて四斗一升あつた時、一升でもへがあつたといふ。まへは出米で入米に對する語で、現今も関西地方で普通この語である。入前とするは、「いりまへ」に漢字を附したので、其字義ではない。

*いりわけ 顔も泣いた顔ちや、こりやどぞいのと、いりわけも言はず知らずに泣きぬたり(萬年草) 内方のいりわけも話で聞いて居ますれば(曾根崎)

「入器」入組んだわり。成り行き事情。

*いりえ 目の前へ連れていて叩き殺して腹をいる(女腹切) 踏込んで一討か、面恥かゝせて腹いよか(天網島) さあ治兵衛踏んで腹いよと(天網島)

「徳」他動詞上一段活用にした語「腹をいる」は腹を刺す。「腹いよか」は腹を懲さうか「腹いよと」は腹を懲せよとの意である。

*いりさ いるさの門の障子戸も、あくるあしたの形見(や)冥途飛脚)

入るさの月の影暗く(最明寺燈)

「入方」入る方。「さ」は方向をいふ、動詞の終止形に著く接尾語である。

*いれい 大磯の虎御前・化粧坂の少將とて兄弟が思ひ人、形見を持參し給ふが、母の異例と聞き給ひ斯くいたばらせ候(世繼曾枝)

「異例」不例。病氣をなだらかにいふ語。

いれこばち 若い女子のざまで入子鉢のやうな面々の子供の世話ばかりやきをらす、こさし出たと憎かろが(女殺)

「入子鉢」同じやうな形した大小數個を組合せ、大きな鉢の内に小さい鉢が段々に入るやうにした鉢である。

いれこびし 黛を誰が八の字に入子菱、桔梗・かたばみ・まりばさみ(賀古教信) さて一重菱・いれこ菱・花菱(門田八島)

「入子菱」紋の名、入子の中に菱のあるもの。「いれこ菱」入智恵。「いれこやうね」は普通に入性根と書けども、「しやうねはもと」正念といふ語から起つたもので、「しやうねん」のんが脱落して出来た語であらう。正念の義についてはその條を見よ。

*いれたて の定めなり(百日曾枝)

「入立」費用を自辨すること。自分持ち。

*いれはな 跡へはんなり入花の、茶びん(橋)こちと今(官)

「入花」は「出花」などの「花」と同じ語で、はなやかの意である。煎茶にいふ語で、湯の注ぎたての香味ははなやかな時分。

*いれぼくろ 顔に焼鐵入處(博多)

「入處」いれずみ。點。

*いろ 惣左衛門が葬禮にいろを着て供して見せ(博多) 然つし處へ色を着して十四五人、棺を寺内へ昇

入れ(小栗判官)

「色」覆也。運歩色葉に「覆衣。イロ、中陰之時著也。」

いろ 九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いる唐子踊いる見事なこ

とげん(博多) また市五郎・三藏の舟は見えいろ、心元な(博多)

血が走るいろ涙が出るいろ(博多)

「や」といふ意に用ふ。現今も長崎熊本地方にて用ひられ、「どうしたやらわからぬ」の意に「どうしたいろ知らん」など言ふ。

*いろ 一座の色、私らも行水して来うと、皆々表に出でにける(水朔日)

送り迎ひの色駕籠も、暫しとだえは何處にも馴染馴染の寐入りばな

(重井節) そよとふくさの色風も、今焼香に立つ煙、反魂香と懐ゆる

かや(反魂香) 色里に誰が身の樂で身を捨つる人はなけれども永朝日

一世一度の色床は、佛もお氣の通らめと、膝にもたれて宜へ(囃丸)

お里は京の色所(蛭合戦) 上方は色どころ、定めて深いわけが(博多)

多) 色争ひの春の山、幔幕錦おりはへて、八重九重の色人は、物見

物見をさしのぞき(十二段) 江口の色湊(松風)

「色」女。詩・序疏に、「謂女人爲色矣。」

「色」籠」とは、遊女の乗つてゐる籠籠。

「色籠」とは、なまめいた風。

「色里」とは、遊里。

「色床」とは、男女同衾、房事に關してらふ。

「色所」とは、淫美な所。上方は色所と當時能くいはれたものと見え、津戸三郎その他の物にも見えである。

「色湊」とは、なまめかしら美しい人。

色直 梅檀女は歪も交さぬ先の色直 嫁入のしるしにうつ石火矢の(國性節後日)

結婚式をしてから常の色に直すことで、嫁は白衣を脱いで、赤衣などの色ある衣装を着ることを。

*いろふ 金銀水晶いろへたていろへたる大伽藍(聖徳太子) 玉をいろへて造りたる臺(文武五人男)

(形)いろどる。竹取物語に「いろはしき瑠璃をいろへて造れり。」「いろ」を「見よ」

いろみぐさ 夢見草より其の外は色見草とてあらばこそ(十二段)

「色見草」紅葉の異名。二條良非撰、神玉集に「色見草」紅葉。秋もはきくする頃の文見草、ちままく惜しき山風を吹く」この、色は草の名寄であつて、色見を色見草にひかけたのである。

いわらじ 「いわらじ」を見よ。

鱧の頭 柎に鬼も恐るゝ鱧の頭(葎女)

昔節分に豆打をなした後、柎葉に鱧の頭をつけ、竹串に貫いて家の入口に挿し、悪魔拂とした。土佐日記に「今日(承平五年正月元日)は京のみぞ思ひやらるゝ、九重のかどのしりくめ繩の、なよしのかしら、ちまも、ちまも」とぞ言合へるといふは、そのものと還き昔からあつたのである。日次紀事(延喜年)十二月節分の條に「同夜々々門戸密懸、挿鱧魚首并骨柎、傳書此二物疫鬼之所畏也。」

いわらじ かかも起きて出や出やと、わめく聲に出女ども、いわらじ諸共表にいづる(丹波與作)

農家の主婦をいふ。按じると「い」あるじ「家」の内にかゝる主婦で、家様など、同じ意が罷つて「い」はらじとなり、「い」はらじと書かれたのであらう。井原西鶴撰「日本代書」卷之五に「拙者が旦那は人にかはり、定まる女房家主となつてあつて「家主」に「い」はらじと傍訓である。女重寶記(元禄十五年刊) 卷之一、女しなまだめの條に「大名のを興隆といふ、百姓のを桐方とも又離鞋といふ、下女には離鞋をいふ、かすといふ離鞋をいふと見えである。即ち農家の主婦が離鞋をいふから、それで農家の主婦をいわらじといふとの説であるが、桐方といわらじが同義語であることは明である。(丹波與作の)の文に「い

わらじ」いはらじと書いた本があるが、これは「い」はらじの字が似てゐるより誤つたものであると、九本七行の古刊本及び八行の古刊本には明に「いわらじ」となつてゐる。

いははた 「いははた」を見よ。

*印 印をも未だ結ばぬに、病人重たき顔を上げ、なう祈もいらぬ(女殺)

印は梵語印陀羅尼(Mantra)の譯、佛菩薩の内證の本誓、事相の上に表示し、手指にて種々の形象を結ぶごとく印を結ぶといふ。印には彌陀の印、觀音の印、不動の印などの種類極めて多い。

いんいんかんかん 立寄り打てば此鼓いんいんかんかん、心耳も妙にこれや(この(天鼓))

(咽吹杖鼓歌) 詩經「鼙鼓有聲」に「鼓咽々」と見え、毛傳に「咽々、鼓節也」と詩經、小雅伐木篇に「坎々鼓之、節々舞之。」

*いんか 傳授口傳許し印可を請けざれば(鐘樓三) 今宵臺子の傳授の書印可の巻物(鐘樓三)

「印可印信認可の義。も佛經の中に見え、佛の眞理として決定し給ふを云ふ。轉じて、師がその弟子に對して其信を徹底を證して與へる宛状、運歩色葉抄に「印可。信也、許也。貝原好古編・呻呼に「印可。小蘇を極むるもの、其師優美の書を與ふるを印可と云、此字佛書に出たり、維摩經曰、若能如是宣坐者、佛所印可也。」

*いんきよくわどう 癰・疔・腫物の一黨、虛勞・陰虛・火動神・腹痛・頭痛(陰虛火動) 病名、精液缺損し熱氣あつて衰弱する病。桂洲著・病名彙編(貞享三年の序あり) 卷三に「陰虛火動。或は醫虛火動と云へり、醫水虛損し相火充り動くことなり、虛勞の症なり。好色三代男卷之四に「下にこがる、思ひ火動となつて勞瘵に身を苦しめ。」

*いんぐわ 因果と因果が寄合つた(傾城佛の愿) わしがやうな因果がなんの阿彌陀になるものか(女腰切)

因果咄め半時も此内に置くことならぬ(女殺)

(因果)事物の本源を因とし、それに應じて終に來れるものを果とす。これを袂義に解して業報の意。この世で悪い報を受けるは、前世で悪因を結んだのによると云ふ。「因果人」とは罪業の深い人。「因果咄」とは業咄。

*いんげん 太兵衛めがいんげん、金に詰つてなんどと大阪中を觸廻し(網龜)

向後時致組留めての、曾我の五郎と組んでなんどいんげん吐

かば、草葉の蔭よりえら骨路裂か
ん(虎が懸)

高慢の氣概振ること。按ずるに、「いんげんは
「いげん」の變つた語であらう。「いんげん」は威
嚴で、正しくは「あびん」また「みんげん」と書
くべきである。「あびん」に「ん」が增加した爲
に「いん」の増加については「わんざん」の條を
見よ。「みんげん」となつたのである。さて「ち
と」との假名遣については論ずるまでもな
く、當時假名遣はやかましういへなかつた
時代である。巢林子撰・水木辰之助陸奥舞に
「わしは存じませぬが、養子の親が名人で弟
子の二百もござつた、道閑様いげんは仰せ
らるれど、私が親の草履取も彼程は厭ました
とあらうを言へば見え、淀無出世蒲徳に、
「うちたん町をこしつげに、いけんふる手のみ
んぢらうのし見え、」と「ち」の假名遣の違つ
てゐるのが明かに知れる。そして「いげん」が
威嚴で、「いんげん」と同意語であり、同じもの
なることも悟られるのである。

いんじゆ 代々に傳はる御國譲り御
印位のしるしの印綬、御肌に懸け
られたり(國性齋)

〔印綬〕印と綬。綬は印の環を承繋ぐ組紐。印
綬は支那では帝王の證據物とも云ふべき物で
ある。漢書後漢に「綬長一尺二寸法十二月、
廣三尺法天地人。」

いんぜふ 極樂へ引接せん(津戶三郎)

〔引接佛菩薩が念佛の行者を引受けて極樂淨
土へ導き入れ給ふこと。〕
〔引接佛は如来を本尊とせる佛堂で、大版四
天王寺にある引接堂とも書かれ、本尊は五
智如来、脇士は月増姫・日増姫・玉照姫の三
三尼の像を安置してある。序に云ふが、引接
と引接は別義である。〕

いんぢ 去年松川いんぢの場、朋輩

打たせし意趣晴し(二段) 彼奴め
はないないいんぢの意趣、われわ
れどもが仲間にて見付け次第に殺
す筈(二段)

「いんぢ打」「いんぢん」といひ、
「印地の字を書けども、いんぢはらしうぢ(石打)の
約語であらう。昔五月五日河原などに出て小
手を投げ、或は
〔天和長久四季あそび〕
〔天和頃所敷〕

敵合ふ少年の遊
附録・徳川實紀
附録・東照宮の
條に「五月五日
兒童の戯れとして
隙を打ち、石
を投ぢちあふ
を假名に「い
んぢうち」といふ。



いんぢの場

黒川道祐撰、日次紀事、五月初五日の條に
「以初木作三大小之刀、是謂富浦刀男兒橫
之於腰、著頭巾、微山伏態、及晚出鴨河邊、
左右分列、佛樂而相歌、是謂印地、又稱
いんぢんや 西國橋の印傳屋の長作
(生玉)
いんぢんは「印度」(India)の訛。「いんぢ
ん屋」は印度等より舶來したる物で、造れる
袋物の類を商店店屋、越後秀彌編、雅言俗語

聖德(安永八年刊)唐草の部に、「印帝地。俗印
傳と云、鼠草あづき草等あり」

*いんぢのこ ちやつと胸を袖に入れ、
いんぢの子いんぢの子と撫摩り(日本武
藝) 寐んぬこせ、音せておめらい
んのかいんのか、目でに覺めたら
背にきつと背負うて、神様へ參ら
う參らう、の、さまの土産には、
でんく太鼓に籥の笛、お山人形
に花おり着せて、打着せて着せ
て、雉子のめん鳥ほろりとおとい
て、しよのしよの、おいとしよの
(天神記)

「いぬのこ(犬の兒)の訛。小兒を眠らさうと
する時にいふ語。故に小兒を眠らさうとして
いぬの中に出るのが多い。貞丈雜記に、
「小兒を抱きて夜中他行するに、紅指を以て小
兒の額に犬といふ字を書く、之をいんのこと
いふ、犬の子といふ事なり、此の如くすれば
廢除になり、狐狸類小兒をおびやかすことな
しといふ。」

いんはたてん 朝拜殿に尊あればい
んはた殿に惡鬼あり、いんはた殿
に駈入り給へば新背殿に惡鬼あり
(振袖始)

〔振袖始〕新背殿に尊ければ、神衣を纏ふ所。
神代紀上に「又見天照大神方織三神衣居、齋
服殿に朝拜殿に尊れば云々」をも見よ。

*いんま 定めし、いんまに來う程に、
まそつとしてから來て下され(重井
筒)

「いま(今)に撥音の増加した語で、「ま
な(眞字)をまなだ」といふ(牛番)を「ま
んば」といふまなだである。」

いんもつ 樽有黄金時服さまざま*

三八
音物持たせ、將監に對面あり(反魂
香) この音物お氣に入らずば、其
方より使者を以て返辨あれ(川中忠
實)音物音信の贈物。
いんやうのむら 抑も馬に七個の祕
事、三個の手綱・五個の鞍、陰陽の
策・朝風(大おろし)(小栗判官)

〔陰陽の策策の仕立譯の名。本朝弓馬要覽
に、「策の仕立譯品々あり、天地の策陰陽の
策六層の儀云々」

いんふる 瓢箪町を腰附けに、いけ
んふる手の印籠の、底にたぎら
すびがらの、烟に油煙たなびきて
(混懸)

〔印籠〕背腰に佩びた小匣で三重または五重に
作り、兩端を組紐で貫き、匣の内にはめと印
判を入れたのが、後には藥を入れたのである。
安齋隨筆卷十一、印籠藥籠の條に詳しく述べて
ある。「ながといんろう」を見よ。

いんる 十方三世の佛菩薩、衆生を
助けんとすの誓願因位の時は願人な
らすや(心五戒巻)

〔因位〕因は果に對する語、位は地位。佛果を
得て佛となる前に修業の地位にあるを因位と
す。正信偈に、法藏菩薩願因位時。

*うい 若い者でかしたでかし
た(三國志) うい奴けな奴きみよい
奴だてな奴が花摺衣(鶴田川)
かはゆらし。けなけなし。狂言・烏帽子折に、
「一段うい奴ぢや」。俳書集等に「ウい能を
ゲなるをほむるにウい奴だ云、ウいは能を